

い じり  
井 尻 遺 跡  
すずめ た 遺 跡  
おき の た  
沖 ノ 田 遺 跡

主要地方道南俣宮崎線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

宮崎県埋蔵文化財センター

い じり  
井 尻 遺 跡  
すずめ た た  
雀 田 遺 跡  
おき の た  
沖 ノ 田 遺 跡

主要地方道南保宮崎線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

宮崎県埋蔵文化財センター

# 序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深いご理解をいただき厚くお礼申し上げます。

宮崎県教育委員会では、主要地方道南俣宮崎線道路改築事業に伴い、平成11年から平成12年にかけて井尻遺跡・雀田遺跡・沖ノ田遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

井尻遺跡では古代の住居跡と水田跡に伴う畦が確認され、雀田遺跡・沖ノ田遺跡では高原スコリアの下から畦に区画された水田跡が検出されました。これらの遺跡から、当時の人々の生活の様子の一端を解明する貴重な資料を得られたことは大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、ご指導・ご助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成13年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 矢野 剛

## 例　　言

1. 本書は、主要地方道南俣宮崎線道路改築事業に伴い、宮崎県教育委員会が実施した井尻遺跡・雀田遺跡・沖ノ田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宮崎県宮崎土木事務所の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査の期間および調査体制は第1章のとおりである。
4. 現地での実測図作成は以下の担当者が行った。井尻遺跡は、山口昇・南中道隆・大村公美恵・福松東一・橋本英俊・雀田遺跡は、南中道隆・崎田一郎・沖ノ田遺跡は、鈴木健二・橋本英俊・安楽哲史が作成した。
5. 本書に使用した写真は、井尻遺跡は、山口、橋本、雀田遺跡は、南中道、崎田、沖ノ田遺跡は鈴木、橋本、安楽が撮影し、空中写真については業者に委託した。
6. 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成、実測、トレースは主として井尻遺跡を山口、雀田遺跡を南中道、沖ノ田遺跡を橋本が行い、一部を整理補助員の協力を得た。
7. 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の5万分の1図を基に作成し、調査範囲図は、宮崎市作成の2千5百分の1図を基に作成した。
8. 土層断面および土器の色調は「新版標準土色帖」に掲った。
9. 本書で使用した方位は、座標北および磁北である。座標は国土座標第Ⅱ系に掲る。レベルは海拔絶対高である。
10. 本書では、遺構に次の略号を使用している。  
　竪穴住居跡・・・SA　　土坑・・・SC　　溝状遺構・・・SE　　不明遺構・・・SZ
11. 本書の執筆は、第1章第1節を重山郁子が行い、第2章を山口、第1章第2・3節、第3章を南中道、第4章、第6章を橋本が分担し、文責は文末に示した。編集は橋本が行った。
12. 自然科学分析は株式会社古環境研究所に委託した。分析結果は第5章であるが、記述は紙面の関係から特に重要と考えられる箇所のみ掲載した。
13. 出土遺物・その他諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

# 本文目次

第1章 はじめ		第3章 雀田遺跡の調査	
第1節 調査に至る経緯	1	第1節 調査の概要	30
第2節 調査の組織	1	第2節 基本層序	30
第3節 遺跡の立地と歴史的環境	2	第3節 遺構および遺物	32
		1 溝状遺構	32
		2 水田跡	32
第2章 井尻遺跡の調査		第4章 沖ノ田遺跡の調査	
第1節 調査の概要	5	第1節 調査の概要	34
第2節 A区の調査	5	第2節 基本層序	35
1 A区調査概要	5	第3節 水田跡1の調査	37
2 基本層序	5	第4節 水田跡2の調査	38
3 遺構と遺物	5	第5節 その他の遺物	38
第3節 B区の調査	18	第6節 小結	42
1 B区調査概要	18	第5章 自然科学分析の結果	43
2 基本層序	20	第6章 まとめ	48
3 遺構と遺物	21		
第4節 小結	25		

# 挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第12図 井尻遺跡A区出土遺物実測図（1）	16
第2図 調査範囲および周辺地形図	4	第13図 井尻遺跡A区出土遺物実測図（2）	17
第3図 井尻遺跡調査区配置図	6	第14図 井尻遺跡B区遺構分布図	19
第4図 井尻遺跡A区遺構分布図	7	第15図 井尻遺跡B区東側壁	20
第5図 井尻遺跡A区西側土層断面図	7	土層断面図	
第6図 井尻遺跡S A 1実測図	8	第16図 井尻遺跡B区畦畔平面図	22
第7図 井尻遺跡A区	10	検出畦畔断面図	
S A 1出土遺物実測図（1）		第17図 井尻遺跡B区S C実測図	23
第8図 井尻遺跡A区	11	第18図 井尻遺跡B区出土遺物実測図	24
S A 1出土遺物実測図（2）		第19図 雀田遺跡基本土層図	31
第9図 井尻遺跡A区	12	第20図 雀田遺跡調査区全体図	31
S A 1出土遺物実測図（3）		第21図 雀田遺跡調査区土層断面図	31
第10図 井尻遺跡A区	13	第22図 雀田遺跡遺構平面図、溝状遺構	33
S A 1出土遺物実測図（4）		断面図、畦畔断面図	
第11図 井尻遺跡A区その他の遺構	15	第23図 雀田遺跡S E 1出土遺物	34
実測図		第24図 沖ノ田遺跡基本土層図	35

第25図 沖ノ田遺跡調査区全体図	36	第29図 沖ノ田遺跡出土遺物実測図	41
第26図 沖ノ田遺跡調査区土層断面図	36	第30図 井尻遺跡B区試料採取地点図	47
第27図 沖ノ田遺跡水田跡1平面図	39	第31図 鶴田遺跡試料採取地点図	47
検出畦畔断面図		第32図 沖ノ田遺跡試料採取地点図	47
第28図 沖ノ田遺跡水田跡2平面図	39		
検出畦畔・水口断面図			

## 表 目 次

第1表 井尻遺跡出土土器觀察表(1)	26	第4表 井尻遺跡出土土器觀察表(4)	29
第2表 井尻遺跡出土土器觀察表(2)	27	第5表 沖ノ田遺跡土層注記表	35
第3表 井尻遺跡出土土器觀察表(3)	28	第6表 沖ノ田遺跡出土土器觀察表	41

## 図版目次

図版 1	1 井尻遺跡遠景	50	図版 5	1 鶴田遺跡遠景	54
	2 井尻遺跡遠景			2 調査区全景	
	3 井尻遺跡A区			3 東側土層断面	
	4 井尻遺跡A区西側土層断面			4 水田跡	
	5 A区SA1遺物出土状況			5 SE1土層断面	
	6 A区SA1完掘状況			6 SE1出土須恵器	
	7 A区SZ2遺物出土状況				
図版 2	8 井尻遺跡B区	51	図版 6	1 沖ノ田遺跡調査区全景	55
	9 畦畔検出状況			2 水田跡1(A区)	
	10 第1畦畔			3 水田跡2(B・C区)	
	11 第1畦畔土層断面			4 B区土層断面	
	12 B区東側土層断面			5 水田跡2(A区)	
	13 足跡検出状況			6 水田跡2(B区)	
	14 SC8検出状況		図版 7	1 水田跡1畦畔断面	56
	15 SC検出状況			2 水田跡2畦畔断面	
図版 3	井尻遺跡A区SA1	52		3 水田跡出土遺物	
	・SZ2出土遺物			4 出土鐵製品	
図版 4	井尻遺跡A区・B区出土遺物	53		5 出土陶磁器(外面)	
				6 出土陶磁器(里面)	

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

主要地方道南伊勢崎線は、東九州自動車道宮崎西インターへのアクセス道路として建設が急がれていた。そのため、平成10年度までの宮崎土木事務所と県文化課との協議で、宮崎市大字跡江付近の拡幅部分について試掘調査を行い、遺跡の所在の有無を確認することになった。それに基づき、平成11年10月8日、20日、11月1日に県文化課により井尻・雀田・沖ノ田地区の試掘調査が行われた。その際行った自然科学分析の結果、稻のプランツ・オバールが多量に検出され、現在使用している水田の下位に古い水田跡が包蔵していることが確認された。また、井尻地区においては、水田に隣接する低位丘陵地の際の表土に土器等の遺物が散在していた。

そこで保存のための協議を行い、遺跡に影響が及ぶ範囲について平成11年度及び平成12年度に発掘調査を行うことになった。現地での発掘調査は井尻遺跡が平成11年11月25日～平成12年1月31日、雀田遺跡が平成11年12月3日～平成12年1月31日、沖ノ田遺跡が平成12年4月29日～7月19日である。

(重山)

## 第2節 調査の組織

井尻遺跡・雀田遺跡・沖ノ田遺跡の調査の組織は次の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

### 平成11年度（井尻遺跡・雀田遺跡）

教育長	笹山 竹義	宮崎県埋蔵文化財センター
教育次長	川崎 浩康	所 長 田中 守
教育次長	岩切 正憲	副 所 長 江口 京子
文化課長	仲田 俊彦	庶 務 係 長 児玉 和昭
課長補佐	矢野 剛	調査第二係長 青山 尚友
主幹兼庶務係長	井上 文弘	主査（調査担当） 南中道 隆<雀田遺跡>
埋蔵文化財係長	北郷 泰道	主査（同上） 崎田 一郎<同上>
同主任主事（調整担当）	重山 郁子	主査（同上） 山口 昇<井尻遺跡>
		主事（同上） 橋本 英俊<同上>

### 平成12年度（沖ノ田遺跡）

教育長	笹山 竹義	宮崎県埋蔵文化財センター
教育次長	福永 孝義	所 長 矢野 剛
教育次長	岩切 正憲	副 所 長 兼 総務課 長 菊地 茂仁
文化課長	黒岩 正博	副所長兼調査第二課長 岩永 哲夫
課長補佐	井上 貴	調査 第三 係 長 菅付 和樹
主幹兼庶務係長	長谷川勝海	調査 第四 係 長 永友 良典
埋蔵文化財係長	石川 悅雄	主査（調査担当） 鈴木 健二
同主任主事（調整担当）	飯田 博之	主任主事（同上） 橋本 英俊
		調査員（嘱託） 安楽 哲史

### 第3節 遺跡の立地と歴史的環境

井尻遺跡・雀田遺跡・沖ノ田遺跡は、宮崎市北西部、宮崎市大字跡江字井尻及び字雀田・字沖ノ田に所在する。このあたりは、大淀川が大きく湾曲する右岸の後背湿地であり、大淀川の氾濫によるシルト・粘土及び砂等の谷底低地堆積物で形成されている。そのため現在も土地の多くが水田として利用されており城ノ下池や深田池などの池も多い。

建武3年（1336年）「土持宣栄軍忠状」によると、すでに鎌倉時代末期には宇佐八幡宮の荘園であった浮田庄の一部として耕地開発されていたところであり、浮田庄内の支配単位としての跡江方が形づくられていたことが確認される。

3遺跡の約800m北側には東西1.3km、南北1.2km、標高20m前後の低位丘陵上及び裾部低地に43基の古墳（現在確認されているのは27基）が分布する生日古墳群が所在する。中でも、3号墳は二段築成で全長143mにも及び、同じく全長123mの1号墳とともに古墳時代前期における日向地域の盟主的存在のものではないかと推測されている。この台地の東崖には縄文時代早期の跡江貝塚が所在し、塞ノ神式土器・押型文土器など多岐にわたる土器や石錐や石錐等の石器、さらに、上部貝層の土壙墓からは人骨が出土している。また、3遺跡の約3km西側には古墳時代の水田跡や壠跡を検出するとともに弥生時代から中世の土器や木器等が出土した町屋敷遺跡が所在し、約2km南西側には中世の水田跡や土器などを出土した鳥ノ子遺跡や中世の水田面や平安時代の多数の墨書き土器等を出土した余り田遺跡が所在するなど、古墳時代から古代、中世にかけての遺跡が周辺に点在している。

（南中道）

### 参考・引用文献

『郷土歴史大事典 宮崎県の地名』 平凡社 1997年

『余り田遺跡』一般国道10号宮崎西バイパス建設事業に伴う発掘調査報告書（2）

宮崎県埋蔵文化財センター 1997年

『石塚城跡 鳥ノ子遺跡』一般国道10号宮崎西バイパス建設事業に伴う発掘調査報告書（3）

宮崎県埋蔵文化財センター 2000年

『宮崎市の文化財』 宮崎市教育委員会 2000年



- |           |               |         |               |            |           |
|-----------|---------------|---------|---------------|------------|-----------|
| 1 井尻遺跡    | 2 雀田遺跡        | 3 冲ノ田遺跡 | 4 跡江貝塚        | 5 生目古墳群    | 6 竹ノ下遺跡   |
| 7 多宝寺遺跡   | 8 権現曾遺跡       | 9 大淀古墳群 | 10 石塚城跡       | 11 余り田遺跡   | 12 高辻城跡   |
| 13 妙圓寺石塔群 | 14 内宮田遺跡      | 15 長嶺城跡 | 16 石用遺跡       | 17 友尻遺跡    | 18 末香寺跡   |
| 19 小村薬師堂  | 20 中福良墓地      | 21 宮ノ城跡 | 22 内野々第1・第2遺跡 | 23 中岡遺跡    |           |
| 24 本城跡    | 25 帷屋形第1・第2遺跡 | 26 学頭遺跡 | 27 宮水流・八見遺跡   | 28 追内遺跡    |           |
| 29 蔵野遺跡   | 30 町屋敷遺跡      | 31 倉岡遺跡 | 32 柏田貝塚       | 33 瓜生野横穴墓群 | 34 池内横穴墓群 |

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 調査範囲および周辺地形図 (1/5,000)

## 第2章 井戸遺跡の調査

### 第1節 調査の概要

井戸遺跡は、宮崎市街地の西部、宮崎市大字跡江字井戸に所在し、宮崎市の中央を東流する大淀川とその支流である本庄川の合流点の南側、標高約30mの大淀川右岸丘陵南東部裾野に位置する。

今回調査を実施した遺跡は井戸遺跡と呼称しているが、その立地や性格から本来は2つの遺跡に別れる。一つは標高10m内外で、丘陵の南東部が開けテラス状の地形を有しており、現況は山林として利用されていた。もう一つは標高7m内外で、山林からさらに南東部に立地する低湿地である。

そこで、前者をA区、後者をB区とし、平成11年11月25日から平成12年1月31日まで調査を実施した。

### 第2節 A区の調査

#### 1 A区調査概要(第4図)

A区の調査面積は600m<sup>2</sup>である。調査区北西から南東にかけては、約30mの緩斜面になっており、比高差は約3mある。文化課による試掘調査では、地表より290cmが盛り土で、その下層では二次堆積のアカホヤが確認されている。そこで、重機にて表土を除去するとともに、調査区北東側に長さ約20m、深さ4mのトレンチを設定して土層の確認を行った。その結果、土器の包含層を確認したため遺構の存在が推定されることとなり、その後人力で掘り下げを行った。

出土した遺物は古代の土師器が主で、特徴的なものとして、布痕土器を多く検出した。また、遺構としては、竪穴住居跡1軒、溝状遺構1条、不明遺構2基、ピット群を検出した。

#### 2 基本層序(第5図)

A区は丘陵裾部に位置することから、北側丘陵部分の表土や、宮崎層群の一部と考えられる風化礫層が過去数回に渡って崩落を繰り返して互層を形成している。そのため、各層に多量の小礫や砂粒の混入が見られ包含層の残存は良好とは言い難い状況であった。調査区で観察された火山灰は、第Ⅲ層で霧島火山起源の高原スコリア(11~13世紀に噴出)であったが、斜面であることから二次堆積の可能性もある。また、トレンチ下層で水成堆積と考えられる二次堆積のアカホヤも確認されている。

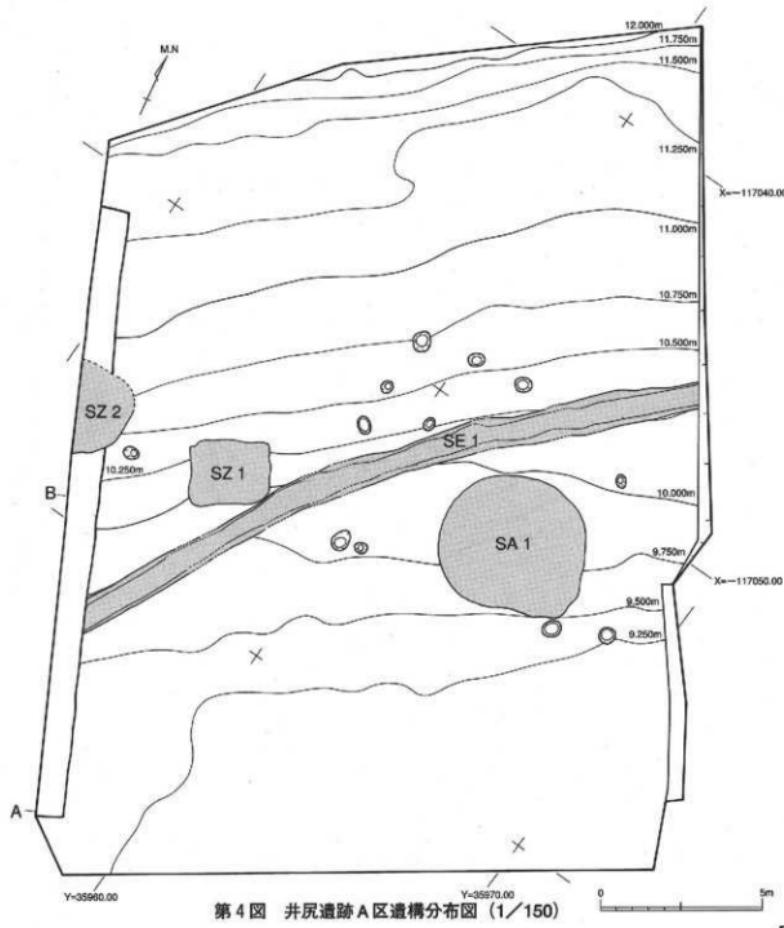
#### 3 遺構と遺物

##### S A 1 (第6図)

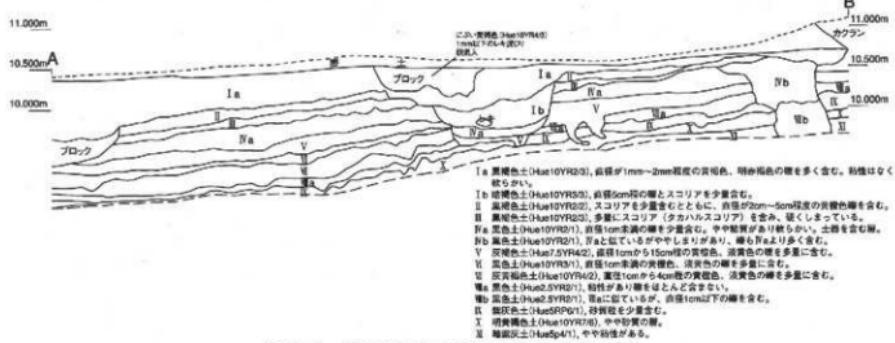
調査区中央部からやや東により検出された。平面プランは不整であるが隅丸方形に近く、規模は長軸3.8m、短軸2.5mを計る。検出面はⅣ層で、深さは北側で68cm、南側で48cmを計る。床面では黒褐色土の貼り床と思われる痕跡をわずかに検出したが、床を平坦に整えたり、傾斜を緩和するといった貼り床本来の目的は確認できなかった。また、床面に4本の柱穴を確認したが配置状況や規模から主柱穴を明確にすることはできなかった。しかし、床面で焼土痕や炭化物が確認できたことから、炉跡などの火災が存在した可能性がある。埋土は北側丘陵の表土や礫の崩落と関連して複雑な様相を呈していた。土層中にⅡ層の砂層が混入していることから、大きく3段階の時期に分かれて埋まつたものと予想したが、各層から出土した土師器片が接合したことより、比較的短期間に埋まつたと考えられる。遺物は甕、壺、布痕土器等が住居跡の西側を中心として出土している。



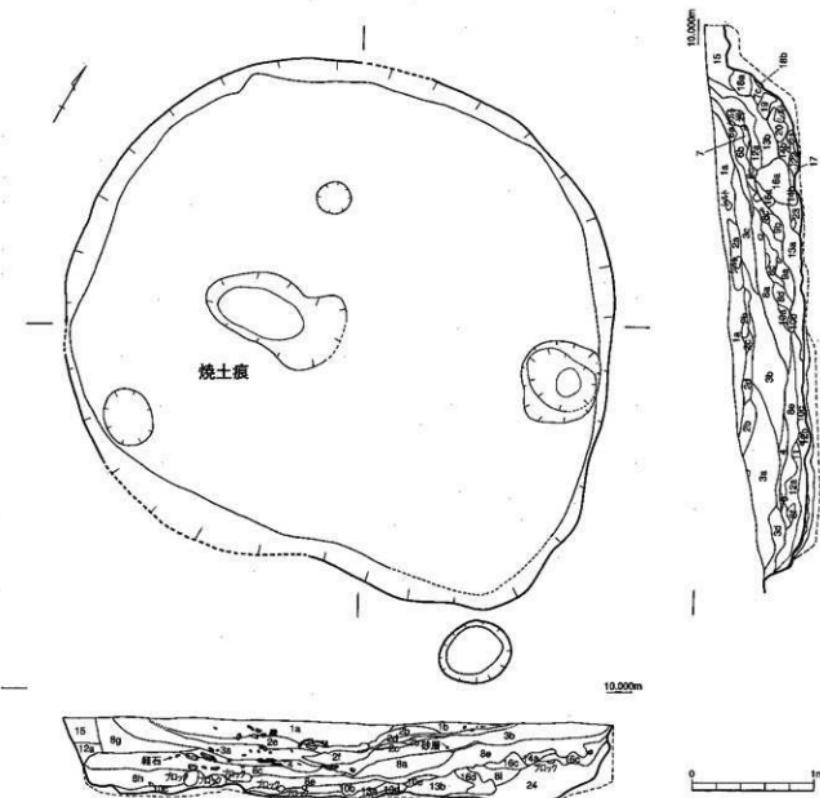
第3図 井尻遺跡調査区配置図 (1/2,000)



第4図 井尻遺跡A区遺構分布図(1/150)



第5図 井戸遺跡A区西側土層断面図 (1/60)



### 第6図 井戸遺跡S A 1実測図 (1/40)

### 遺物(第7・8・9・10図)

1~71までが土師器である。その内1~13までは甕である。甕は底部まで復元できたものは無く、口縁部から胴部上半までのものがほとんどである。また、胎土には5mm以下の砂粒を多く含んでいる。1~2は、口縁部が直線的に外方に開き、胴部にふくらみを有する。調整は胴部外面に横ナデ、頸部には強い横ナデが見られる。胴部内面には下から上に向かってのケズリと、口縁部に丁寧な横ナデが見られる。3~4は口縁部がやや外反しながら外方へ開き、胴部があまりふくらみを持たない。調整は内外面ともに口縁から頸部まで横ナデで整えられており、頸部には強いナデが見られる。また、胴部外面には縦方向のハケ目、内面胴部には下から上へのケズリが見られる。6~9は小型の甕である。6~7の器形は2と似ている。胎土は精緻で、外面や内面口縁部に丁寧なナデが見られる。また、内面にケズリの後でナデを施している。8~9は口縁部がやや外反し、胴部があまりふくらみを持たない小型の甕である。8の口縁部は横ナデ、胴部内面には上方へのケズリが見られる。9は風化が著しく調整は不明である。10~11の胴部外面には横ナデ、胴部内面には上方へのケズリが見られる。

14~35までは壺である。形態は、

- ・体部が直線的に開き、口縁部が短く内湾するタイプ(14·15·16·21·24·27·28)
- ・体部が直線的に開き、口縁部まで直線的に伸びるか若干外反しているタイプ(22·23·26·29·30·32)
- ・体部が内湾しながら開き、口縁部も若干内湾するタイプ(17·18·19·20·25·31·33·35)

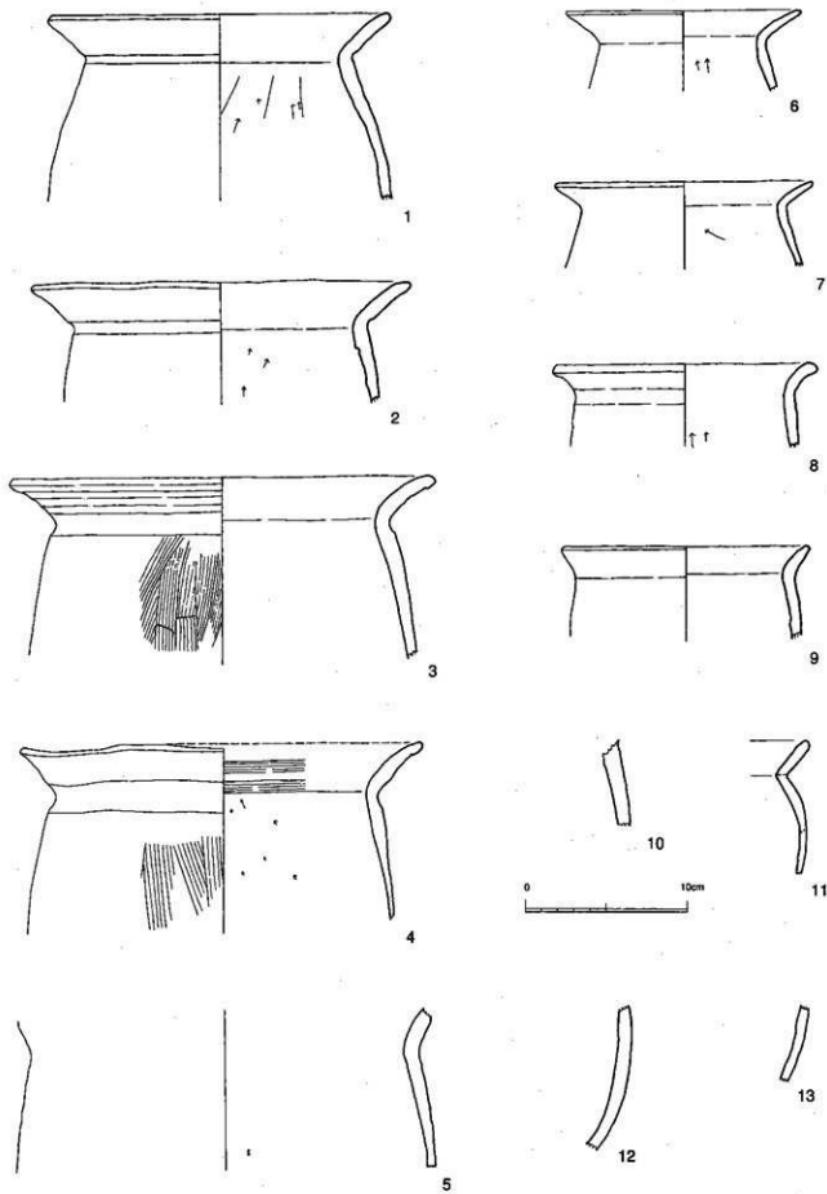
の3種類に分類できる。底部はヘラ切りで、調整はほとんどが内外面とともに回転ナデを施しているが、22·31·33は風化が著しく調整を明確に確認できない。また、24·32は底部のヘラ切りの後、ナデ調整をしている。21は口径が14.6cmの比較的大きい壺で、外面には指頭圧痕が見られる。

34~35は黒色土器の壺である。35は口径16.6cm、器高4.3cmを計る大型のもので、底部はヘラ切りの後、ナデ調整が施されている。

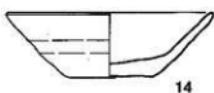
36~71は布痕土器である。口唇部の形態は、同一個体においてもかなり差があり、三角形状の断面を基本とするが、口唇部の稜が弱く、丸みを帯びているものもみられる。この場合は他と比較して器壁も薄くなる傾向がある。また、底部は尖底を基本とするが、やや丸みを帯びるものもある。本遺跡で出土した布痕土器は風化が著しいが、以下特徴的なものを記す。口唇部の断面が三角形状になっていないものは50·51·56·57·61である。胎土に7mm以下の砂粒を多く含むのが36·39·42·46·48·55·60·66である。41は焼成が良好で外面に縦方向のナデが見られる。36·47·49·52は熱の影響を受けて一部分が赤変している。65の内面にある布目の単位は4mm×2mm程度で、他の個体の布目と比較すると大きくなっている。69は尖底であり、70·71はやや丸みを帯びると思われる。72は紡錘形の土錐であり、直径2mmの穴が直線的に形成されている。

### S Z 1(第11図)

S A 1の北西約6mで検出され、南東端をS E 1にわずかに切られている。埋土は、宮崎層群小砾片を多量に含む黒褐色土である。平面形は方形プランを呈するが、傾斜地に掘り込まれていたため著しく削平を受けており残存状態は良好でなかった。底面は比較的平坦で、中央に2ヶ所ピット状の掘り込みが確認された。検出面からの深さは、北側で20cm、南側で3cmを計る。遺物は出土しておらず、時期及び遺構の性格は不明である。



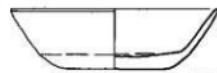
第7図 井戸遺跡A区SA1出土遺物実測図(1) (1/3)



14



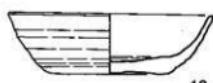
15



16



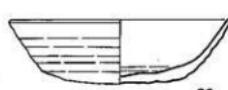
17



18



19



20



21



22



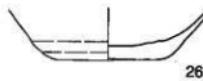
23



24



25



26



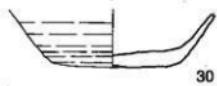
27



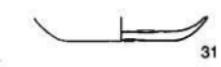
28



29



30



31



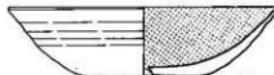
32



33



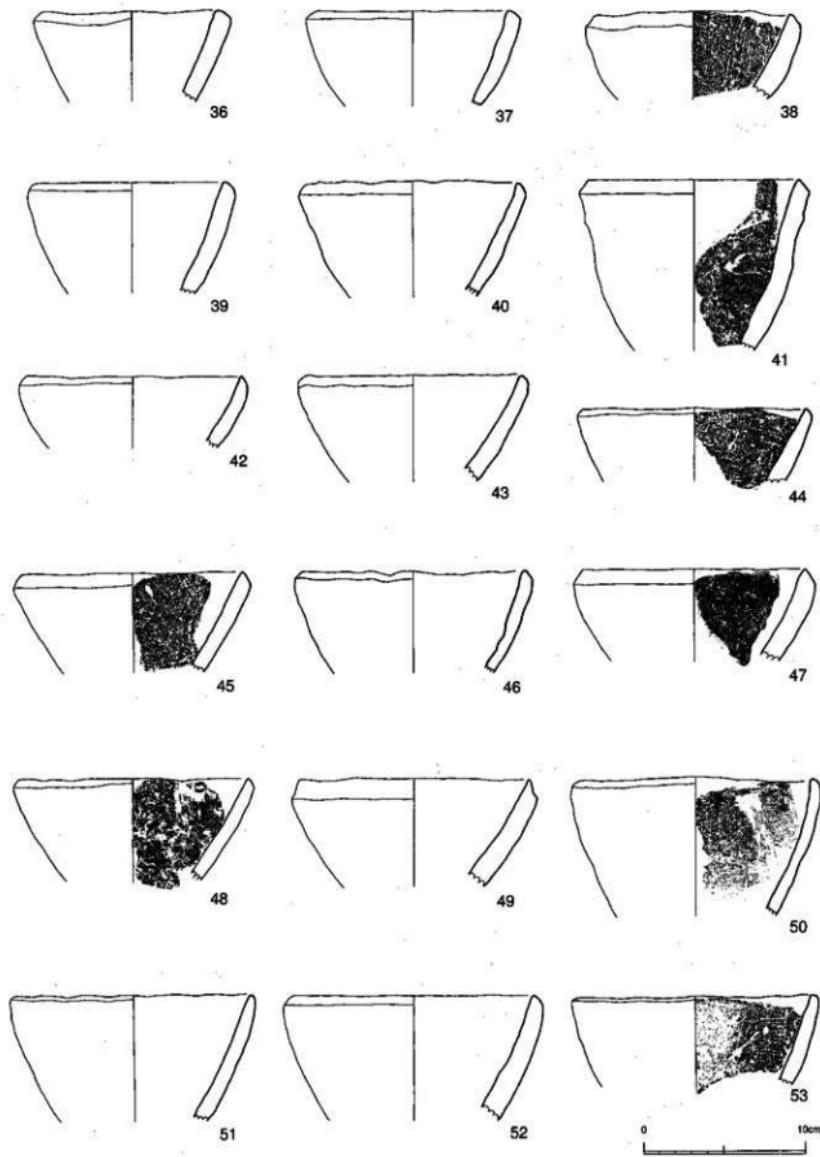
34



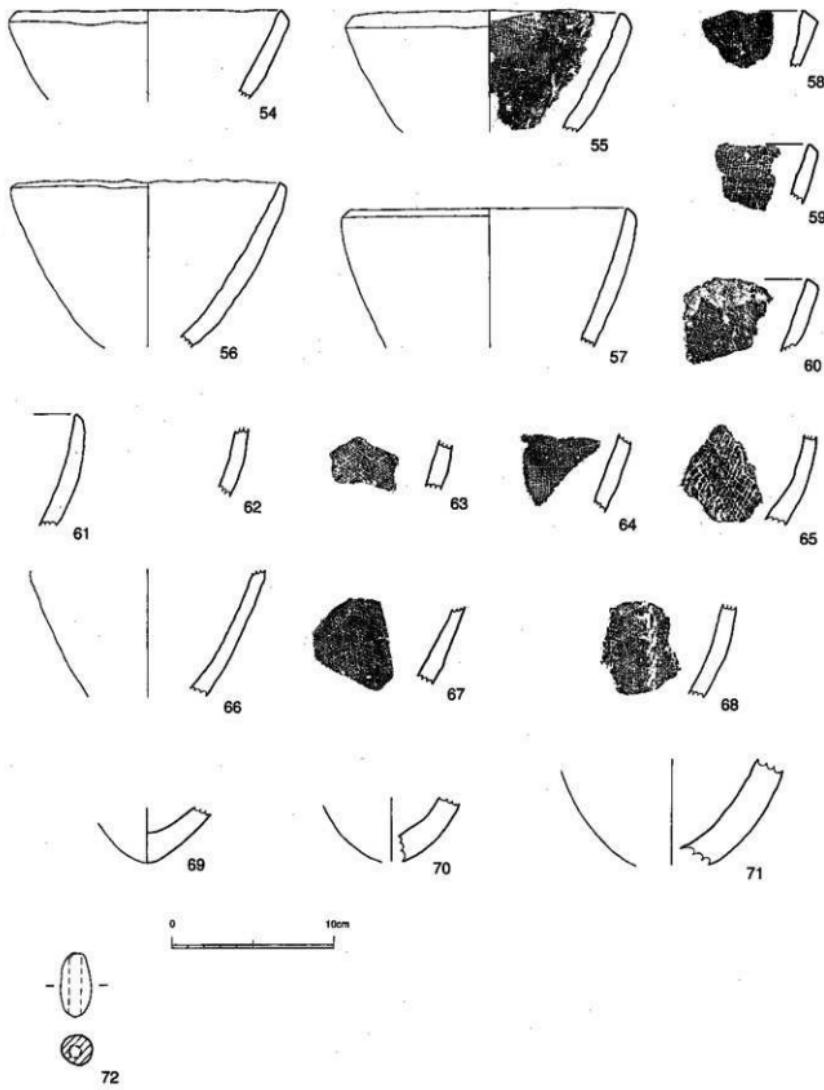
35



第8図 井戸遺跡A区SA1出土遺物実測図(2)(1/3)



第9図 井戸遺跡A区SA1出土遺物実測図(3)(1/3)



第10図 井戸遺跡A区SA1出土遺物実測図(4)(1/3)

## S Z 2(第11図)

調査区西端で検出した。土層確認のためのトレーナーでの破壊と、調査区外への広がりなどからその規模や形状は確認できなかった。中央付近には小さな落ち込みがあり、この落ち込みはピットによって切られている。埋土は全体的に黒褐色土で、泥岩質の礫を多量に含む層と少量含む層の2層が確認された。床面の状況が一様でなく、壁の立ち上がりも不明瞭であることからここでは不明遺構とした。埋土中から多量の布痕土器や土師器の小片が出土している。

### 遺物(第12図 73~82)

73~75は土師器の壺である。全体的に風化が著しく形態を分析するには至らなかった。底面はヘラ切りがなされ、73はヘラ切りの後ナデ調整がみられる。調整は外内面ともに回転ナデが施してある。

76は黒色土器の壺である。内面に単位は不明だが、丁寧な横ミガキが見られる。

77~80は布痕土器である。S A 1から出土したものと比べてやや布目の単位が大きい。

81はふいごの羽口である。内面には絞り痕がみられ、外面には鉛滓が付着している。

82は須恵器の長頸壺である。頸部から口縁部である。内外面ともに回転ナデが施されている。

## S E 1(第11図)

S A 1の北側に位置している。主に礫片を含む黒褐色土の埋土で、調査区を東西に横切るように検出された。溝の幅は約1.4m、検出面からの深さは西側で約9cm、東側で約80cmを計る。遺物の出土ではなく構築の時期は特定できないが、調査区西側でわずかにS Z 1と切り合っており、埋土状況から、S Z 1より時期的に新しいと考えられる。

### ピット群(第4図)

調査区のほぼ中央付近に主として分布している。柱穴は径約40cm、深さは約20cmと同様な規模のものが多い。ほぼ東西方向と南北方向に2間以上×2間以上の柱穴の並びが確認できるが、1棟の掘立柱建物としての復元はできなかった。また、遺物は数基のピット内から、流れ込みと考えられる土師器の小片がわずかに出土したのみである。

### その他の遺物(第12図~第13図)

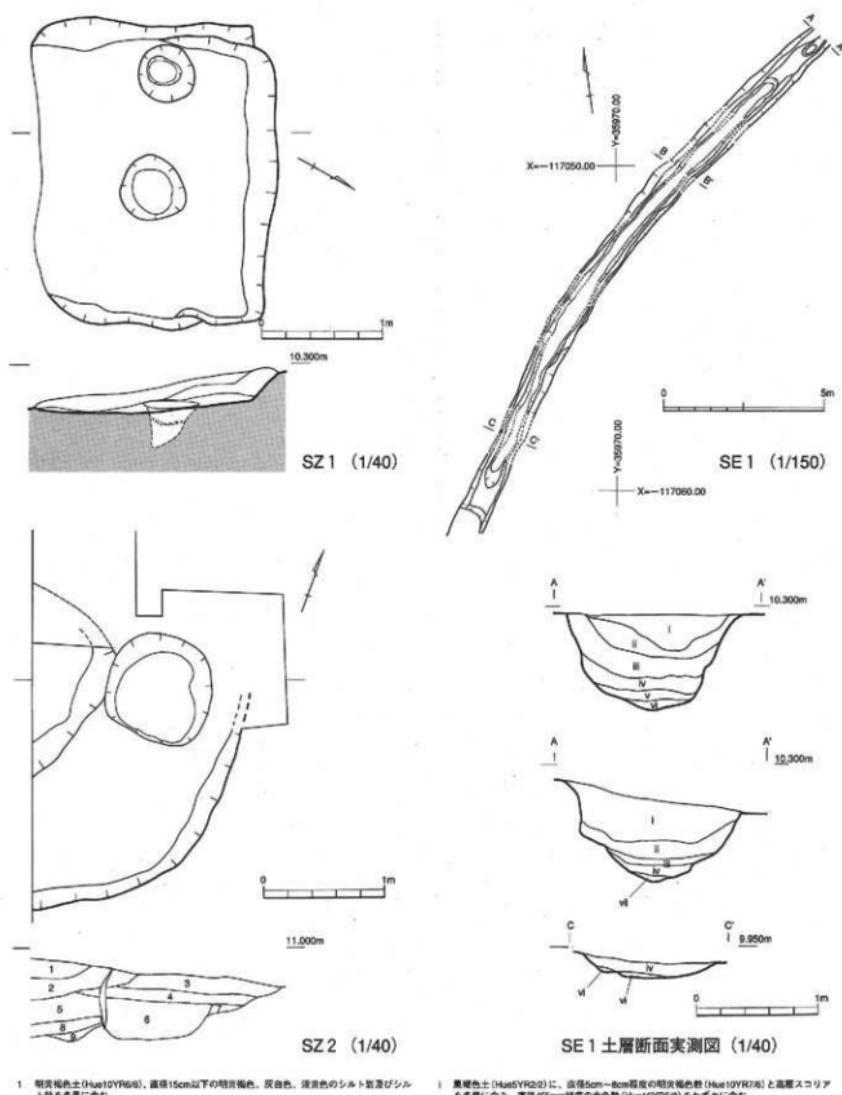
調査区の第II層を中心として、遺構外から出土した遺物について記す。83~86は土師器甕である。83は口縁部が大きく外反し、胴部にあまりふくらみを持たない。風化が著しく、調整は外面に横ナデが施されている。84~85は小型の甕である。ともに口縁部の開きが小さく、胴部にふくらみを持たない。調整は口縁部外内面に横ナデが施されており、特に84には頭部に強い横ナデがみられる。84の内面にはススの付着がみられ、85の内面には上方向へのケズリがみられる。86は口縁部が大きく外反するタイプの甕の小片である。87は把手付甕の口縁部で焼成は良好である。口唇部に外内面ともに横ナデが施されており、内面には左斜め上方向へのケズリがみられる。

88は土師器の高台付塊で、出土遺物中唯一完形に復元することができた。貼り付け高台を有し、口径が19.9cm、器高が7.9cmと比較的大型で9世紀前半のものと推定される。調整は底部にナデ、胴部から口縁部の外内面に回転ナデが施されている。

89~103までは土師器の壺で全体的に風化が著しい。形態は、

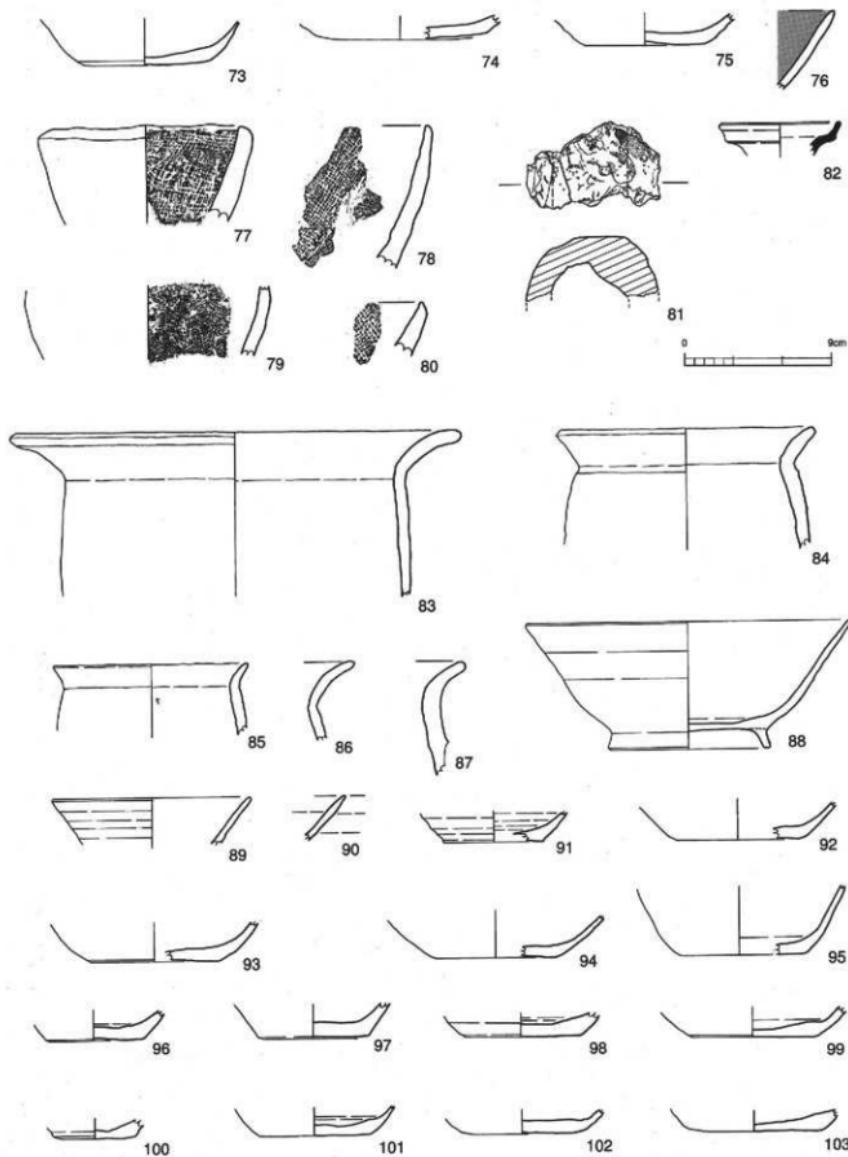
・体部が直線的に開くタイプ(89·92·96·97·99)

・体部が内湾しながら開くタイプ(91·93·94·95·98·101·102·103)

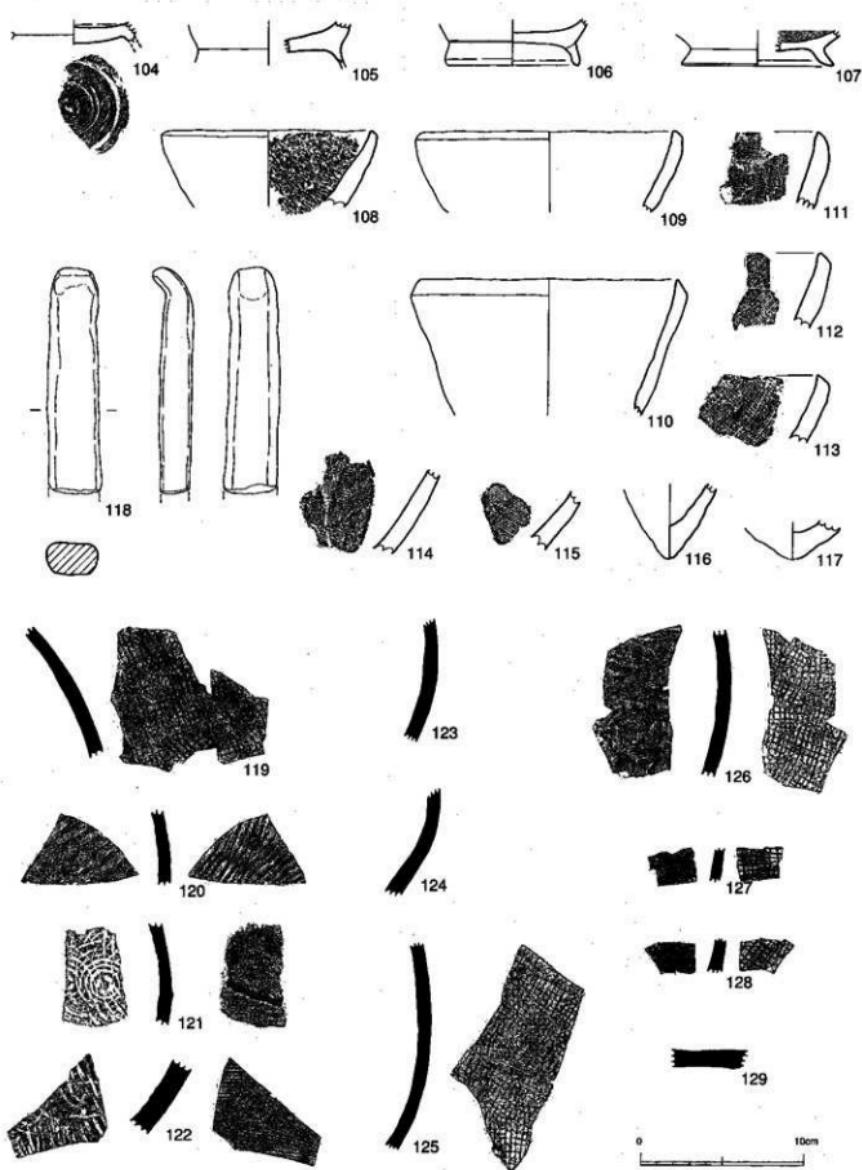


- 明黄褐色土 (Hu6SYR6/6), 直径15cm以下の明黄褐色、灰白色、淡黄色のシルト若びシルト粒を多量に含む。
- にぶい黄褐色土 (Hu6SYR6/4), 直径5mm大のシルト粒を含む。また、直徑1cm以下の泥質褐色、灰白色土を含み、さざらさとしている。
- 明褐色土 (Hu7SYR6/2), 直径が1.5cm~2cm程度の砂を多量に含む。土素小粒もさざらに含む。
- 褐色土 (Hu7SYR6/1), 直径0.5mm~1cm程度の砂を多量に含む。
- 黒褐色土 (Hu6SYR6/2), 直径5mm以下のシルト質を多量に含む。
- 黒褐色土 (Hu6SYR6/1), 直径0.5mm~1cm程度の砂を多量に含む。
- 黒褐色土 (Hu6SYR6/1), 直径0.5mm~1cm程度の砂を多量に含む。土素小片を混入する。
- 黒褐色土 (Hu6SYR6/1), 直径5cm以下のシルト質を多く含む。やや粘性がある。
- 青褐色土 (Hu6SYR6/5), 直径10cm以下のシルト質、直徑2cm以下の泥質土。赤褐色、明黄色粒子を多く含む。

第11図 井戸遺跡A区その他の構造実測図



第12図 井尻遺跡A区出土遺物実測図（1）（1/3）（73～82まではS22出土）



第13図 井戸遺跡A区出土遺物実測図（2）(1/3)

の2種類に分類できる。底部はヘラ切りで、97・98はヘラ切りの後ナデをしている。調整は、外内面ともに回転ナデを施している。91は焼成が良好で、底部に外から内に向けて穿孔がみられる。

104～107は壊の可能性もあるが、残存状況では十分判断ができないので高台付塊とした。104は底部をヘラ切りしたあと高台をつまみ出しによって成形している。106は風化が著しく調整は判別できないが、高台は後付されたものである。107は黒色土器で、高台が丁寧に後付されている。

108～117までは布痕土器である。108・109は口唇部断面が三角形状を呈していない。また、熱により赤変色している。111・112・113は口唇部の外面の棱がつよく、内面の布目も明瞭である。116は底部で尖底となっているが、117はやや丸みを帯びている。

118は杓子形土器の柄と考えられる。

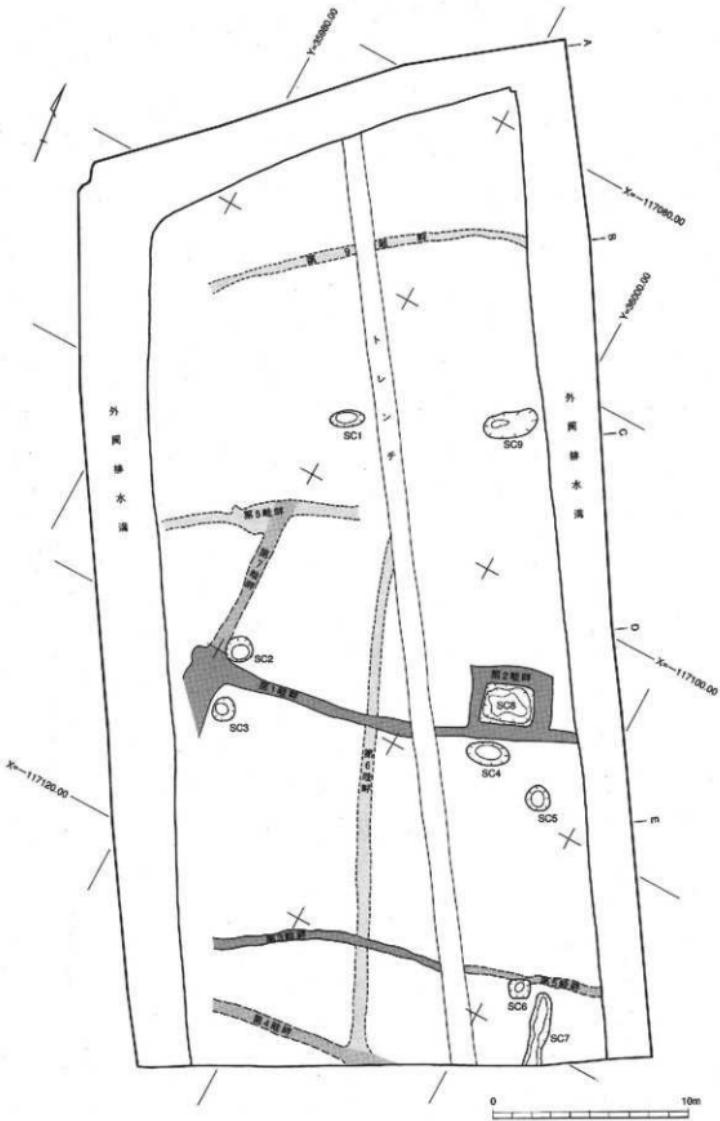
119～135は須恵器の甕である。119は外面に格子目タタキ、内面は当て具痕をナデ消している。120は外面が平行タタキ、内面は平行当て具痕をナデ消している。121は外面が横方向のナデ調整に施釉がかかり、内面は同心円状の当て具痕が残る。122の外面は横方向のハケ目をつけた後ナデ、内面は平行当て具痕と同心円状当て具痕の双方が残る。123,124は内外面とも丁寧なナデがみられる。125～126は外面に格子目タタキ、内面に当て具痕のナデ消しを施している。134は須恵器の甕の底部で、外面に自然釉がかかっている。

### 第3節 B区の調査

#### 1 B区調査概要(第14図)

B区の調査面積は1,320m<sup>2</sup>ある。調査区北西から南東にかけて約50mの比高差は約60cmで非常に緩やかな斜面となっている。文化課による試掘調査では、現地表から30cm～50cmの深さで5,000個/g～7,000個/g程のプラント・オパールが検出されおり、水田跡の包蔵が確認された。そこで、重機により表土及び第Ⅱ層の中位までを除去し、その後は人力により掘削・精査を繰り返した。また、本区は低湿地であることから、常に水が地表に湧き出している状態だったため、排水対策として幅約3m、深さ約1.2m～1.8mの外周排水溝を設置し、センサー付の2インチ水中ポンプを常時稼働させることとした。さらに、外周排水溝には安全対策の一環として、園芸用の御池ボラを平均約50cmの深さで敷き詰め調査を行った。遺構検出面においては、調査が冬季であったことから霜・雨対策を考慮して、夜間は調査区全面をブルーシートで覆うこととした。

調査は第Ⅲ層上面の水田跡検出を主眼として行った。その結果、畦畔状の高まりを数条検出したものの明確な水田区画の検出までは至らなかった。検出時の畦畔の幅は30cm～40cm、断面では最高6cmの高まりを確認した。この耕作面には多数の人や家畜の足跡が確認できたが、その中に第Ⅱ層のスコリアを含む黒褐色土が混入しており、上層からの踏み込みの可能性が指摘された。また、畦畔に沿うようにして9つの土坑も検出した。その用途や性格については不明だが、畦畔との切り合いが少ないとから、ほぼ同時期の遺構であると推察される。遺物については、古代から中世の土師器や須恵器、近世の陶磁器など数十点出土したものの、A区から流れ込んだ可能性もある。

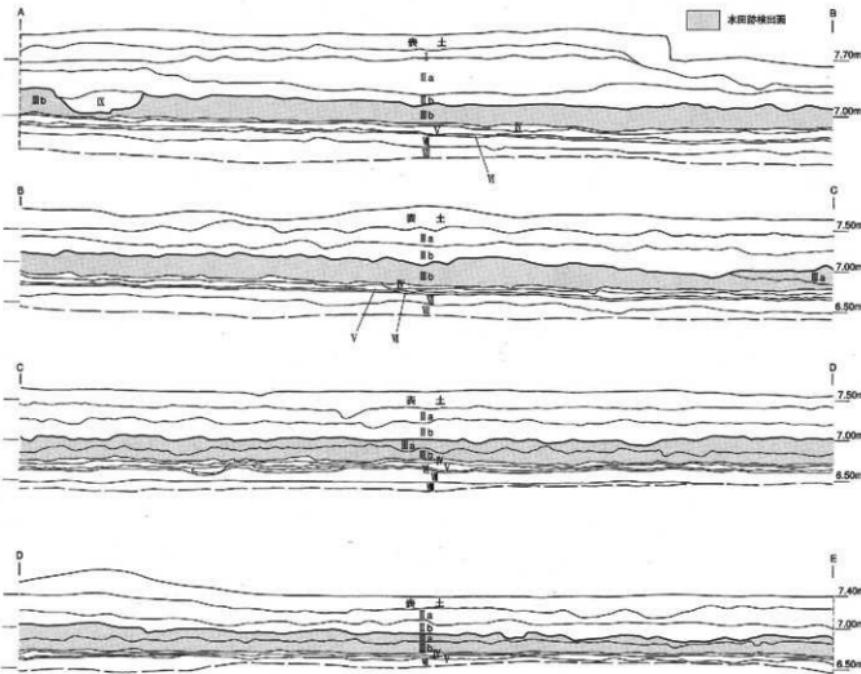


第14図 井戸遺跡B区遺構分布図 (1/250)

## 2 基本層序(第15図)

井尻遺跡は、丘陵南東の裾部に立地しているため、降雨等の影響で丘陵の土砂が流れ込むなどして、長期間にわたって少量ずつ土砂が堆積してきたことが想定される。遺跡の北部約1 kmに大淀川が東流しているものの、洪水等による多量の土砂の流入は認められない。そのため、連続する各時期の水田耕作が前の時代の水田耕作層を搅拌しており、各層の畦畔等の残存状態は極めて悪い。また、遺物の出土状態も隔たった時期の遺物が同一層位から出土するなどして、時代の推定が難しい状況であった。

井尻遺跡で確認された火山灰は、霧島高原スコリア(11~13世紀)と二次堆積したアカホヤ火山灰(約6,300前)の2種類である。霧島高原スコリアは第Ⅱ層において顕著に確認され、さらに、上部への搅拌混入もわずかながら確認された。このことからこの火山灰に覆われた層の年代は、平安時代末期と推定される。また、二次堆積したアカホヤ火山灰は第Ⅲ層で確認された。



I 土 緑褐色土 (Hue7.5YR20)

褐色土 (Hue7.5YR40), 直径2mm以下の褐色の粒子及び暗褐色の鉱物を含む。粘性をし。

II 土 黄褐色土 (Hue10YR20), 直径5mm以下の白色粒子と褐色褐色の鉱物を多く含む。やや硬質。わずかに土器(土器鉢)を含む。

III 土 黄褐色土 (Hue10YR22), 直径2mm以下の白色粒子と褐色褐色の鉱物を多く含む。シルト質。わずかに土器(土器鉢)を含む。

IV 土 黒色土 (Hue10YR20), 直径3mm以下の白色粒子に加えて、にじい青褐色粒子や明黄褐色粒子を含む。

V 土 黑色土 (Hue7.5YR21), 直径1mm以下の白色粒子を少度含む。粘土質。

VI 土 黄褐色土 (Hue7.5YR20) と緑褐色土 (Hue7.5YR30), 黑色粘土 (Hue4), 黑色粘土 (Hue5), 黄褐色土 (Hue7.5YR20) の互層。

VII 土 黄褐色のあら褐色土 (Hue7.5YR20) とやや粘性のある灰色土 (Hue) の互層。

VIII 反対側地土 (Hue10YR20), 直径1mm~2mmの大粒石を多量に含む。

IX 土 二次堆積アカホヤ (Hue6/7/7)

X 土 初期の互層をなしている。

XI 土 緑褐色土 (Hue7.5YR20), 直径5mm以下の鉱石や、直徑2mm以下の白色粒子、直徑1mm以下の褐色の粒子 (Hue10YR20) を含む。

第15図 井尻遺跡B区東側壁土層断面図 (1/60)

### 3 造構と遺物

#### 水田跡(第16図)

前述した試掘調査の結果を受けて、第Ⅲ層における水田跡の検出をめざした。まず、重機を使用し地表から30cm~40cmの深さを確認しながら、表土、第Ⅰ層、第Ⅱ層中間までを除去した、その後、調査区を縦断する長さ約48m、幅約1mの畦畔断面確認のためのトレーナーを入れ、霧島高原スコリアの残存状況を確認しながら、残りの第Ⅱ層を人力で除去していった。平面上で畦畔を検出するため、調査土の表面がささくれ立たぬように、刃先を鋭く研いだ両刃草削鎌を主に用いながら表面を慎重に掘り下げ、精査していった。第Ⅲ層の精査をしていく段階で、畦畔状の痕跡を9条確認した。

この畦畔状の痕跡については、

- ① サブトレーナーによる土層断面確認で、土層の隆起が明確に確認できたもの。

【第1畦畔、第2畦畔、第3畦畔】

- ② サブトレーナーでわずかに黒色粘土の高まりを確認したもの。

【第4畦畔、第5畦畔、第7畦畔】

- ③ 上空からの観察で畦畔状の土色の変化が確認できたもの

【第6畦畔、第8畦畔、第9畦畔】

の3つに分類して検出した。(第16図参照) 検出時の畦畔の幅は30cm~40cm、高まりは最高6cmを確認した。畦畔は旧地形の等高線に直交するものと、等高線に沿うものの2方向に走っていることから、当時の水田が丘陵から徐々に標高を下げながら、棚田状に作られていたことが推測できる。また、明確な水田区画の検出までは至らなかったものの、畦畔の長軸は約10~12m、短軸は約8mを計り、面積約80m<sup>2</sup>~120m<sup>2</sup>程度の中規模の水田区画が想定できる。畦畔には盛土のみのものや杭列・矢板列を伴うもの、横板を並べるもの、芯材を入れるもの等様々な種類があるが、本遺跡の場合は、水田を区画したり、耕作土の流出を防いだりする目的から盛土のみで畦畔を構築していたととらえられる。

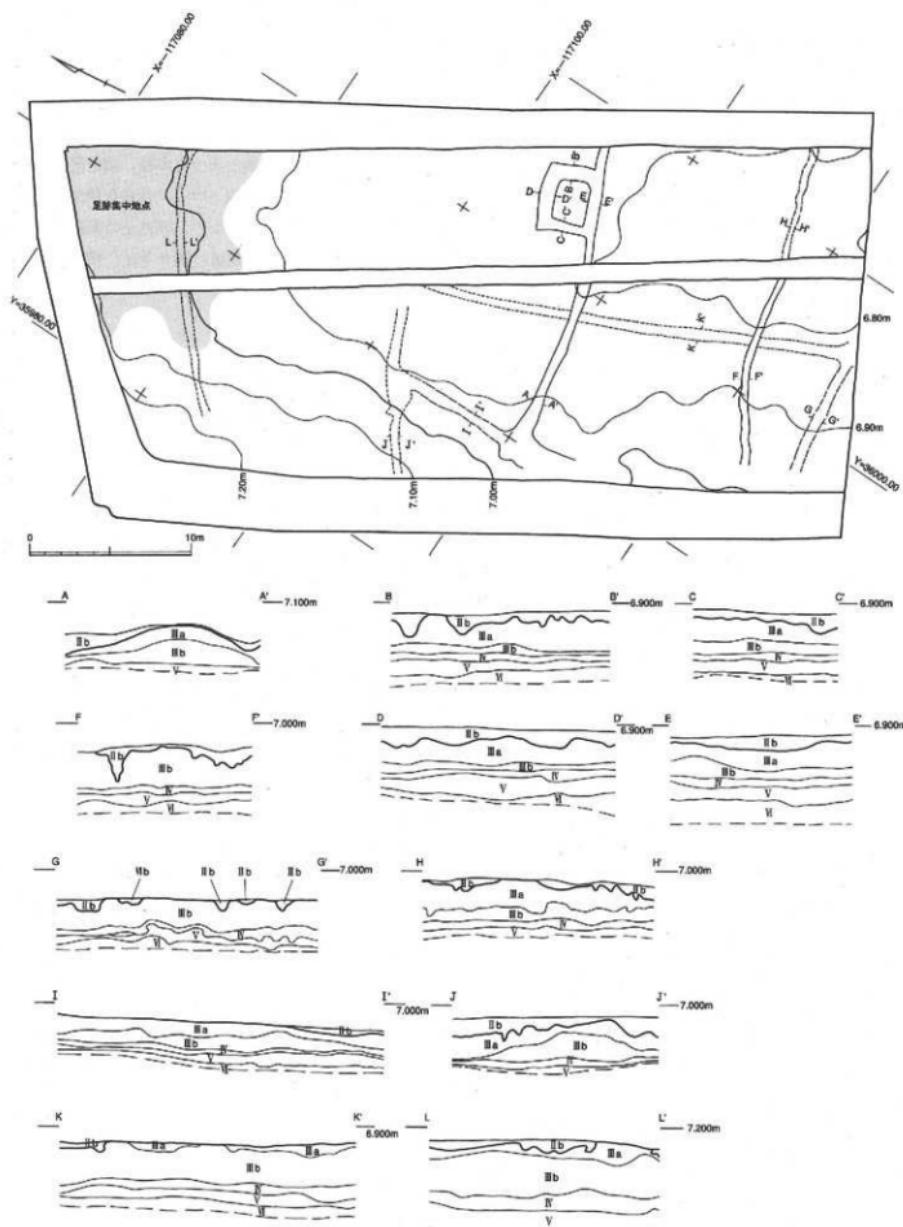
畦畔を検出した面の北東部約100m<sup>2</sup>の範囲で、多くの人や農耕用家畜の足跡も確認されたが、これらの足跡からは一定の規則性は見出せなかった。足跡の踏み込み部分の埋土は、第Ⅱ層の高原スコリアを含む土が混入しており、上層の水田耕作の際の踏み込みと考えられる。

#### 土坑(第17図)

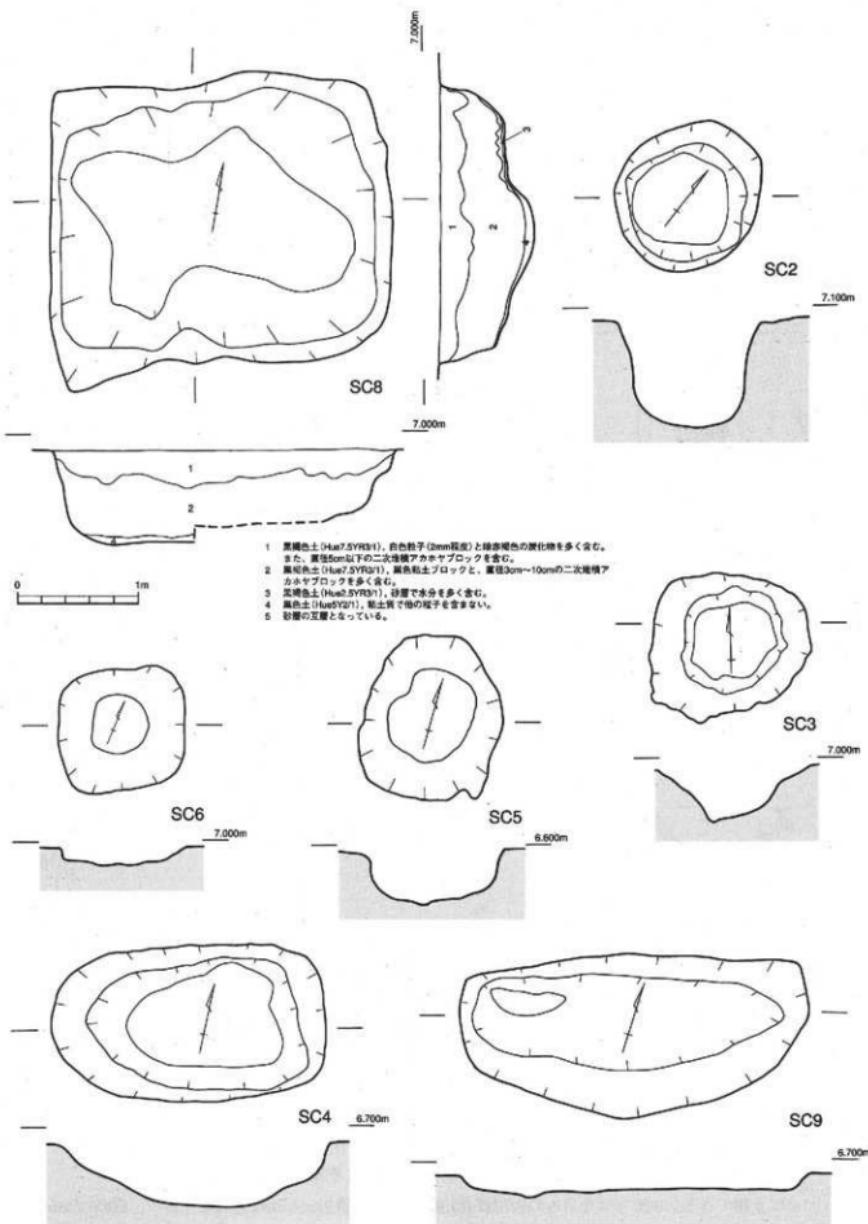
畦畔の検出面とほぼ同一面の第Ⅲ層で、畦畔に沿うような位置で9基の土坑を確認した。平面プランは方形、円形、楕円形と多様で、深さも約20cm~約90cmとそれぞれ異なっていた。最大土坑のSC8は長軸で2.8m、短軸で2.4mを計り、深さは約80cmである。9基の中で唯一SC6が第5畦畔を切っていることから、畦畔検出面と同時期、もしくはその後に掘られたものであると推察できる。埋土は下層の二次堆積のアカホヤブロックを含む黒褐色土が中心で、掘られて間もない間に一気に埋め戻された様相を呈していた。これらの土坑の用途については不明である。

#### 遺物(第18図)

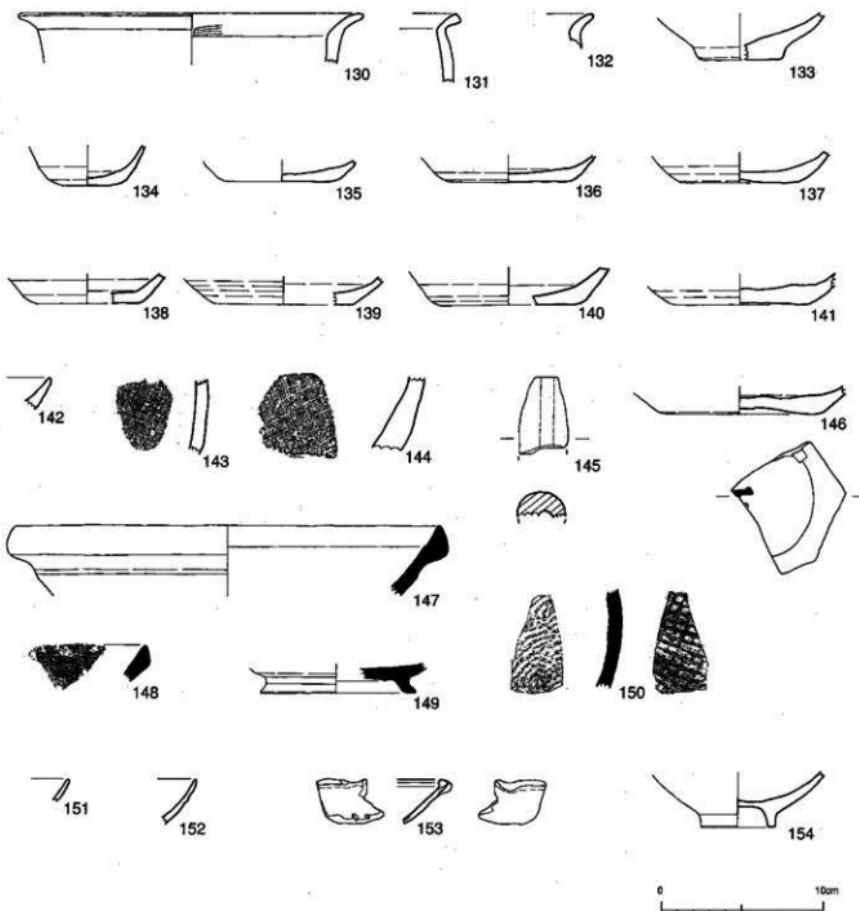
調査区内より約300点程の遺物が第Ⅲ層から上層で出土したが、ほとんどが風化著しい土師器の小片で、口縁部や底部の残存が確認される遺物はわずかであった。水田跡検出面で取り上げた遺物は、131・133・137・139・141・147・149・158・159で、その他はⅠ層かⅡ層で出土したものである。130は口縁部が外反しながら開き、腹部にふくらみをもたない小型の甌である。内外面ともに口縁部には横ナデがみられる。全



第16図 井戸遺跡B区畦畔平面図(1/300), 検出畦畔断面図(1/20)



第17図 井戸遺跡B区SC実測図 (1/40)



第18図 井尻遺跡B区出土遺物実測図 (1/3)

体的に灰色に変色しており二次焼成を受けているものと考えられる。131も小型の甕だが口縁部が外方に開き、胴部にふくらみをもつものである。内外面ともに横ナデが見られ、二次焼成を受けた痕跡がみられる。133はやや下方に突出した円盤状の高台をもつ土師器壺である。風化が著しく調整は不明である。134~142は土師器の壺である。底部はヘラ切り主で、135~136はヘラ切り後にナデ調整されている。その他については風化著しいものが多く、流れ込みの影響が考えられる。

143・144は布痕土器の胴部である。内面の布目の単位が細かく明瞭である。

145は土錐である。完形ではないものの現存長4.8cm、最大幅3.0cmと比較的大型であり、直径7.5mmの穴が直線的に形成されている。

146は土師器の坏であり底部裏面に墨書の一部が確認できるが、文字については特定できない。底部はヘラ切りの後ナデ調整がしてある。

147・148は東播系の捏鉢である。149は須恵器で高台付塊である。150は須恵器の甕胴部である。外面は格子目タタキ後ナデ調整がなされ、内面には同心円状の当て具痕がみられる。

151～154は陶器である。152は天目茶碗である。153は片口鉢で、内外面ともに回転ナデがみられる。また、内面にヘラ状工具による条線がみられる。154は肥前系の碗である。内面に蛇の目釉はぎがみられ、置付けに白砂が融着している。151は154と同一個体と考えられる。

#### 第4節 小 結

井尻遺跡では、立地条件や遺構の性格の違いからAとBの2区に分けて調査を進めた。A区は主に古代から中世にかけての集落跡、B区においては同時期における水田跡の検出を主眼とした。同一遺跡で発掘方法や検出遺構が異なり、限られた期間内でA区とB区を並行して調査を進めることは困難を極めたが、調査で得られた知見について簡略ではあるがまとめを述べる。

##### A区について

調査区内では、竪穴住居跡1軒、溝状遺構1条、不明遺構2基、ピットが検出され、やや風化が著しいものの土師器・須恵器が出土している。土師器坏は、底部から口縁部へ開きながら直線的に伸びており、端部でやや外反するものと、端部でやや内湾するもの、底部から口縁部へ開きつつやや内湾しながら伸びるもの3種類を確認した。いずれも調整は須恵器に類する回転ナデの多様が特徴的で、底部はヘラ切りのみが確認された。塊も調整は坏と同様の特徴がみられ、削り出し高台と付け高台の2種類が確認された。甕は長胴形のものと、やや胴部にふくらみをもつ2種類が出土しているが、いずれも口縁部は強く外反している。布痕土器も多く出土しており、底部が尖底のものとやや丸みを帯びるもの2種類がみられる。これらの土師器の特徴から、9世紀末から10世紀前半までの時期におさまる遺物と考えられる。

##### B区について

調査区第Ⅲ層において、明確な水田区画は検出できなかったものの、確認された9条の畦畔は3種類に分類できる。この畦畔の伸びに若干の復元を加えると、面積が80～120m<sup>2</sup>程度の中規模の水田区画が出現する。これらの畦畔は地形傾斜に応じており、柵田状の区画を作ることによって畦畔の方向が正方位に描ってきたと推測できる。この点については、平安時代前半から中世にかけての水田跡調査をしている友尻遺跡、前田遺跡においても同様の指摘をしている。自然科学分析の結果では、検出面全てでプラント・オバールを検出し、全体の平均でも3,700個/gと比較的高い値が出ていることから、本遺構では稻作が行われていた可能性が高いといえよう。時代推定の鍵層となるのが霧島高原スコリアであるが、このスコリアの測定年代は11世紀から13世紀を示している。また、古代から近世にかけての遺物が出土しているが風化が著しい土師器が多く、A区からの流れ込みと想定できることから、本遺跡の遺構検出面において稻作が行われた時代も古代末から中世にかけてと考えられる。

(山口)

第1表 井尻遺跡出土土器観察表(1)

考古番号	種別	形態	部位	出土地点	法 量(cm)			手法・調査・文様はか 色				胎土の特徴	備考
					口径	底径	高さ	外表面	内表面	外面	内面		
1	土師器	甕	口縁部 肩部 腹部	A区SA1	20.5			横ナデ	横ナデ後、上辺 向のケズリ。横 ナデ	灰白、褐灰 黄褐色の砂粒を含む	1~2mmの褐色、灰褐色。 黄褐色の砂粒を含む	内面が黒化している	
2	土師器	甕	口縁部 肩部 腹部	A区SA1	22.9			横ナデ	斜方方向のケズリ と横ナデ	浅黄緑	灰白、褐灰 5mm以下の褐色砂粒を含む		
3	土師器	甕	口縁部 肩部 腹部	A区SA1	24.6			上方向のハケメ	不明	褐 にぬい程	にぬい程	1~5mmの褐色、明褐色、1~2 mmの灰色、白色摩耗を含む	風化著しい
4	土師器	甕	口縁部 肩部 腹部	A区SA1	24.4			ハケ目模	上方向のケズリ と横ナデ。且に右 側方向のハケメ	明黄緑	明黄緑	1mm以下の灰白色、灰褐色。透 明砂粒を含む	外間にすすけ付着度、内間に 炭化物付着。部分的に風化
5	土師器	甕	口縁部 肩部 腹部	A区SA1	22 (底部)			不明	ケズリ、ナデ	浅黄緑	明黄緑	2mm以下の褐色、3mmの灰褐色。 1mmの黒化透明、1mm以下の 乳白色砂粒を含む	
6	土師器	甕	口縁部 肩部 腹部	A区SA1	14.4			ナデ	上方向のケズリ とナデ	にぬい程	にぬい程	1~3mmの褐色、3mmの灰褐色。 乳白色砂粒を含む	風化著しい
7	土師器	甕	口縁部 肩部 腹部	AK区SA1	15.6			不明	横方向のケズリ	褐	浅黄緑	1~4mmの褐色、1~4mmの茶 褐色砂粒を含む	
8	土師器	甕	口縁部 肩部 腹部	A区SA1	15.7			横ナデ	上方向のケズリ とナデ	浅黄緑	浅黄緑	1~5mmの褐色、1~3mmの 灰白色、1~2mmの白色砂粒を 含む	
9	土師器	甕	口縁部 肩部 腹部	A区SA1	15			あらいナデ	あらいナデ	浅黄緑	浅黄緑	2mm以下の褐色、褐色砂粒を 含む	風化著しい
10	土師器	甕	口縁部 肩部 腹部	A区SA1				横ナデ	横ナデの後、上 方向のケズリ	にぬい程	褐灰	1~3mmの褐色、2mmの褐色 砂粒を含む	内面が黒化している
11	土師器	甕	口縁部 肩部 腹部	AK区SA1				ナデ	上方向のケズリ とナデ	にぬい程	にぬい程	1~3mmの褐色、褐色、灰褐色。 砂粒を含む	風化著しい
12	土師器	甕	肩部	A区SA1				不明	ケズリ	明黄緑	にぬい程	2~3mmの褐色、灰褐色、赤褐色 砂粒を含む	風化著しい
13	土師器	甕	肩部	A区SA1				ナデ	不明	にぬい程	にぬい程	2mm以下の黒褐色、茶褐色、灰 褐色砂粒を含む	
14	土師器	坪	口縁部 底部 全体	A区SA1	12.6	5.1	4	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	褐	黄緑	0.5mm以下の褐色砂粒を含む	風化著しい
15	土師器	坪	口縁部 底部 全体	AK区SA1	12.2	6	3.1	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	褐	褐	0.5mm以下の褐色砂粒を含む	
16	土師器	坪	口縁部 底部 全体	A区SA1	12.4	6.6	3.8	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	褐	褐	0.5mm以下の褐色砂粒を含む	風化著しい
17	土師器	坪	口縁部 底部 全体	A区SA1	13.1	7.6	4.2	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	褐	褐	0.5mm以下の褐色砂粒を含む	風化著しい
18	土師器	坪	口縁部 底部 全体	A区SA1	12.4	7.2	3.8	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑	2mm以下の褐色、4mm以下の 灰白色砂粒を含む	
19	土師器	坪	口縁部 底部 全体	A区SA1	13	7.5	3.5	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	褐	褐	きめ細かな褐色砂粒を含む	
20	土師器	坪	口縁部 底部 全体	A区SA1	13.4	8.85	4	回転ナデ、ヘラ切り 後ナデ	回転ナデ	豊	褐	きめ細かな褐色砂粒を含む	
21	土師器	坪	口縁部 底部 全体	A区SA1	14.6	8.6	4.9	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	褐	褐	0.5mm以下の褐色砂粒を含む	
22	土師器	坪	口縁部 底部 全体	A区SA1		5.4		回転ナデ	回転ナデ	黄緑	褐	0.5mm以下の褐色砂粒を含む	
23	土師器	坪	口縁部 底部 全体	A区SA1		6.4		回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	にぬい程	にぬい程	きめ細かな褐色砂粒を含む	
24	土師器	坪	口縁部 底部 全体	A区SA1		7.7		ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	灰褐色 にぬい程	灰褐色 にぬい程	1mm以下の褐色砂粒を 含む	
25	土師器	坪	口縁部 底部 全体	A区SA1		6.2		回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	黄緑	黄緑	0.5mm以下の褐色砂粒を含む	
26	土師器	坪	口縁部 底部 全体	A区SA1		6.2		回転ナデ	回転ナデ	黄緑	黄緑	0.5mm以下の褐色砂粒を含む	風化著しい
27	土師器	坪	口縁部 底部 全体	A区SA1		6.7		回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	黄緑	明黄緑	0.5mm以下の褐色砂粒を含む	風化著しい
28	土師器	坪	口縁部 底部 全体	A区SA1		7		回転ナデ、ヘラ切り	不明	黄緑	黄緑	きめ細かな褐色砂粒を含む	風化著しい
29	土師器	坪	口縁部 底部 全体	A区SA1		7.2		回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	浅黄緑	褐	0.5mm以下の褐色砂粒を含む	外間に朱色のしみ
30	土師器	坪	口縁部 底部 全体	A区SA1		7		回転ナデ、ヘラ切り	不明	黄緑	黄緑	0.5mm以下の褐色砂粒を含む	風化著しい
31	土師器	坪	底部	AK区SA1		7.2		回転ナデ、ヘラ切り	不明	褐	褐	0.5mm以下の褐色砂粒を含む	風化著しい
32	土師器	坪	底部 全体	A区SA1		7.4		回転ナデ、ヘラ切り 後ナデ	回転ナデ	黄緑	黄緑	きめ細かな褐色砂粒を含む	

第2表 井戸跡出土土器観察表(2)

報告書 番号	種類	形態	部位	出土地点	法 量(cm)		手法・調査・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備 考	
					口径	底径	高さ	外器面	内部面	外面	内面		
33	土師器	杯	体部 底部	A区SA1		7.8		回転ナデ	不刷	黄棕	浅黄	0.5mm以下の褐色砂粒を含む	風化著しい
34	土師器	杯	口縁部	A区SA1	16.6			回転ナデ	内面、横方向の ミリキ	暗黄褐	黒褐	Bめ細かな褐色砂粒を含む	内面
35	土師器	杯	体部 ～ 底部	A区SA1	10.3	6.6	4.3	回転ナデ、ヘラ切 削ナデ	内面、三ガタ	明黄褐	灰	1mm以下の黄褐色・褐色砂 粒を含む	内面
36	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	11.6			不明	不明	棕	棕	1~5mmの灰色・4mmの褐色 砂粒を含む	風化著しい
37	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	11.8			不明	不明	黄棕	棕	4mm以下の褐色砂粒を含む 3mm以下の茶褐色・褐色砂粒を含む	風化著しい
38	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	11.4			不明	布目庄痕	黄色	黄	2mm以下の褐色砂粒を含む	風化著しい
39	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	13			ナデ	不明	にぬ・輕	にぬ・輕	1~4.5mmの褐色・4mmの褐色 砂粒を含む	風化著しい
40	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	13			不明	不明	棕	棕	1~5.5mmの褐色・2mmの赤 色砂粒を含む	風化著しい
41	土師器	鉢	胴部	A区SA1	13.2			ナデ	布目庄痕	にぬ・黄褐	にぬ・黄褐	1~5mmの褐色・2.5mmの淡 黄色砂粒を含む	やや風化
42	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	13.2			不明	不明	棕	棕	1~3mmの褐色・淡褐色砂 粒を含む	風化著しい
43	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	13.6			不明	不明	棕	棕	3~6mmの褐色と淡褐色の乳白 色の砂粒を含む	風化著しい
44	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	13.6			不明	布目庄痕	棕	棕	1~3mmの褐色・1~4mmの灰 色砂粒を含む	風化著しい
45	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	13.8			ナデ	布目庄痕	棕	棕	1~5mmの褐色砂粒を含む 2mmの茶褐色砂粒を含む	一部風化著しい
46	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	13.7			不明	不明	棕	棕	1~4mmの褐色・1mmの茶 褐色砂粒を含む	風化著しい
47	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	13.8			不明	布目庄痕	棕	棕	4mm以下の褐色・褐色砂 粒を含む	風化著しい
48	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	14.2			不明	布目庄痕	明黄 色	明黄 色	2~10mmの褐色砂粒を含む	風化著しい
49	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	14.2			不明	不明	にぬ・輕	にぬ・輕	1mm以下の乳白色・褐色砂 粒を含む	風化著しい
50	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	14.6			不明	布目庄痕	棕	棕	1~6.1~2mmの褐色・1~5mmの 灰褐色砂粒を含む	風化著しい
51	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	14.7			不明	不明	棕	棕	1~8mmの褐色砂粒を含む 3mm以下の茶褐色砂粒を含む	風化著しい
52	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	14.4			ナデ	不明	棕	棕	にぬ・輕	にぬ・輕
53	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	16			不明	布目庄痕	棕	棕	1~6mmの褐色・3mmの褐色 砂粒を含む	風化著しい
54	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	16.2			不明	不明	棕	棕	1~3mmの褐色・1mmの褐色 砂粒を含む	風化著しい
55	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	16.2			不明	布目庄痕	棕	棕	0.5~2mmの褐色砂粒を含む	風化著しい
56	土師器	鉢	口縁部	A区SA1	17			不明	不明	棕	棕	1~4.5mmの褐色・1mmの灰 色砂粒を含む	風化著しい
57	土師器	鉢	口縁部	A区SA1				ナデ	不明	棕	棕	1~2mmの褐色・2~4mmの 褐色・2mmの黑色・褐色先端 砂粒を含む	風化著しい
58	土師器	鉢	口縁部	A区SA1				不明	布目庄痕	にぬ・輕	にぬ・輕	1mmの茶褐色砂粒を含む	風面の風化が著しい
59	土師器	鉢	口縁部	A区SA1				不明	布目庄痕	棕	棕	2mm以下の褐色・6mmの褐色 砂粒を含む	風化著しい
60	土師器	鉢	口縁部	A区SA1				不明	布目庄痕	浅黄	にぬ・輕	1~5.5mmの淡褐色砂粒を含む 10mmの褐色砂粒を含む	風化著しい
61	土師器	鉢	口縁部	A区SA1				不明	不明	棕	棕	1~3mmの褐色砂粒を含む	風化著しい
62	土師器	鉢	胴部	A区SA1				不明	ケツリ	灰	灰	1~3mmの褐色・褐色砂 粒を含む	風化著しい
63	土師器	鉢	胴部	A区SA1				ナデ	布目庄痕	棕	棕	4mm以下の褐色・褐色砂 粒を含む	風化著しい
64	土師器	鉢	胴部	A区SA1				ナデ	布目庄痕	にぬ・黄褐	にぬ・黄褐	1~2mmの褐色・1mmの褐色 砂粒を含む	風化著しい
65	土師器	鉢	胴部	A区SA1				あらいナデ	布目庄痕	棕	棕	5mm以下の褐色・褐色砂 粒を含む	風化著しい
66	土師器	鉢	胴部	A区SA1	11.4 (側面)			不明	不明	棕	にぬ・輕	1~2mmの灰白色・2.5mmの 褐色砂粒を含む	風化著しい
67	土師器	鉢	口縁部 ～ 胴部	A区SA1	~			ナデ	布目庄痕	にぬ・輕	にぬ・輕	1~2mmの褐色砂粒・灰色の砂 粒を含む	外面に薄くすが付着
68	土師器	鉢	胴部	A区SA1				ナデ	布目庄痕	棕	棕	5mm以下の灰褐色・灰褐色 砂粒を含む	
69	土師器	鉢	底部	A区SA1				不明	不明	棕	棕	1~2mmの黒褐色砂粒を含む	風化著しい
70	土師器	鉢	底部	A区SA1				不明	不明	棕	棕	1~10mmの褐色砂粒を含む	風化著しい
71	土師器	鉢	底部	A区SA1				ナデ	不明	棕	棕	7mmの黑色・黒褐色は白色砂 粒を含む	風化著しい
72	土師器	土器	A区SA1	最大長 3.95 最大幅 1.90 重量9.6				不明	不明	棕	にぬ・輕	2.5mm以下の灰白色・2.5mmの 褐色砂粒を含む	風化著しい
73	土師器	环	体部 ～ 底座 底座 ～ 底座 底座	AKSZ2		7.7		回転ナデ・ヘラ切	回転ナデ	棕	棕	きめ細かく褐色砂粒を含む	
74	土師器	环	底座 ～ 底座 ～ 底座 底座	AKSZ2	10.4			不明	不明	棕	棕	1mm以下の透明・乳白色・灰白 色砂粒を含む	風化著しい
75	土師器	环	口縁部	AKSZ2	7.4			回転ナデ・ヘラ切	回転ナデ	棕	棕	きめ細かく褐色砂粒を含む	風化著しい
76	土師器	环	口縁部	A区目痕				ナデ	内面	褐 色	褐 色	きめ細かく褐色砂粒を含む	口縫部黒斑
77	土師器	环	口縁部	A区SA1	11.5			不明	布目庄痕	棕	棕	2~6mmの褐色・灰白色・灰 色砂粒を含む	風化著しい
78	土師器	环	口縁部	AKSZ2				ナデ	布目庄痕	浅黄	にぬ・輕	1.5~4.5mmの淡褐色砂 粒を含む	外部に剥離庄痕

第3表 井戸跡出土土器観察表（3）

報告書 番号	種別	器種	部位	出土地点	法 量(cm)			手 法・調査・文様ほか		色 調		地土の特徴	備 考
					口径	底径	高さ	外表面	内部面	外面	内部		
79	土師器	井 口縁部	A区S2					ナデ	布目正直	黒	黒	2~6mmの灰白色、1.5~4mmの凹凸感砂粒を含む	
80	土師器	井 口縁部	A区S22					不明	布目正直	黒	黒	1mm以下の凹凸感砂粒を含む	風化著しい
81	土師器	窓口	A区S22					鉛付材、気泡多数	不明	黒	に高い赤褐色	3mm細かな橙色砂粒を含む	推定外径8.2内径4.5
82	須恵器	長持型	口縁部	A区S22	7.05			回転ナデ	回転ナデ	黄灰	黒	きめ細かい	
83	土師器	甕	A区W	15.9				不明	ナデ	明瞭灰 暗灰質	に高い黄褐色 灰褐色	1~3.5mmの褐色・灰白色砂粒を含む	風化著しい
84	土師器	甕	A区II層	27				不明	不明	に高い黄褐色 に高い黒	に高い・黒	1~5mmの赤褐色、1~3mmの灰白色砂粒を含む	風化著しい
85	土師器	甕	A区II層	9.8 (底部)				不明	ナデ,ケズリ	に高い黄褐色 灰褐色	に高い・黒	1~5mmの赤褐色・灰白色砂粒 1~1.5mmの褐色・浅灰色・灰褐色砂粒を含む	風化著しい
86	土師器	甕	A区II層					不明	不明	黒	黒	1~4mmの褐色砂粒を含む	
87	土師器	把手付 甕	A区表土					ヨコナデ,斜方 にカクス	浅黄褐	浅黄褐	黒	1~4mmの茶褐色、1~2mmの灰褐色、1~2mmの灰白色砂粒を含む	風化著しい把手付
88	土師器	高台付 甕	A区II層	19.0 (高台)	9.8	7.9		回転ナデ	回転ナデ	黒	黒	1~3mmの茶褐色、1~2mmの灰褐色、1~1.5mmの灰白色砂粒を含む	風化著しい
89	土師器	甕	A区II層	12.1				回転ナデ	回転ナデ	黒	黒	3mm細かな褐色砂粒を含む	
90	土師器	甕	A区表土					回転ナデ	回転ナデ	黒	黒	きめ細かな褐色砂粒を含む	
91	土師器	甕	A区II層		4.2			回転ナデ,へら切り の後未調査	回転ナデ	に高い・黄褐色	に高い・黄褐色	12mm以下の乳白色・に高い・黄褐色砂粒を含む	
92	土師器	甕	A区表土		7.5			回転ナデ,へら切り	回転ナデ	黒	黒	きめ細かな褐色砂粒を含む	
93	土師器	甕	A区II層		8.4			へら切り	回転ナデ	黒	黒	きめ細かな褐色砂粒を含む	風化著しい
94	土師器	甕	A区表土		7.4			へら切り	不明	黒	黒	きめ細かな先灰褐色斑を含む	風化著しい
95	土師器	甕	A区II層		7.4			不明	回転ナデ	浅黄褐	浅黄褐	0.5mm以下の褐色砂粒を含む	風化著しい
96	土師器	甕	A区表土		5.9			へら切りの後未調査	不明	黒	黒	きめ細かな褐色砂粒を含む	風化著しい
97	土師器	甕	A区II層		6.5			回転ナデ,へら切り の後未調査	回転ナデ	浅黄褐	浅黄褐	2mm以下の褐色・灰褐色・鐵褐色斑を含む	
98	土師器	甕	A区DSI層		7.4			回転ナデ,へら切り の後未調査	回転ナデ	黄褐	黄褐	鐵褐色・白褐色砂粒を含む	
99	土師器	甕	A区III層		7.9			へら切りの後未調査	不明	黒	黒	きめ細かな褐色砂粒を含む	風化著しい
100	土師器	甕	A区DSI層		5.2			回転ナデ,へら切り の後未調査	回転ナデ	浅黄褐	浅黄褐	微細な白色砂粒を含む	
101	土師器	甕	A区西レント		7.5			回転ナデ,へら切り	回転ナデ	浅黄褐	浅黄褐	12mm以下の褐色・暗褐色砂粒を含む	
102	土師器	甕	A区III層		7			ナデ,へら切り	ナデ	浅黄褐	浅黄褐	きめ細かな褐色砂粒を含む	風化著しい
103	土師器	甕	A区表土		8.3			へら切り	不明	に高い	黒	きめ細かな褐色砂粒を含む	風化著しい
104	土師器	高台付 甕	底部	A区II層				へら切り	回転ナデ	黒	黒	0.5mm以下の褐色砂粒を含む	風化著しい
105	土師器	高台付 甕	底部	A区II層	8.7			ナデ	ナデ	に高い・黄褐色 に高い・黒	に高い・黒	きめ細かな褐色砂粒を含む	風化著しい
106	土師器	高台付 甕	底部 体部	A区II層	8.2			不明	浅黄褐	黒	黒	0.5mm以下の褐色砂粒を含む	
107	土師器	高台付 甕	底部	A区DSI層	9 (高台)			回転ナデ	内黒,不明	褐灰	褐灰	微細な褐色・無色透明光沢砂粒を含む	
108	土師器	井 口縁部	A区表土	12.5				ナデ	布目正直	黒	黒	3~7mmの粗大2mm以上の粗大 凹凸感砂粒を含む	
109	土師器	井 口縁部	A区II層	15.2				不明	風化著しい	黒	黒	12mm以下の中灰色砂粒を含む	風化著しい、外壁にスス付着
110	土師器	井 口縁部	A区表土	17				ナデ	不明	に高い・黄褐色	黒	きめ細かい	風化著しい
111	土師器	井 口縁部	A区表土					ナデ	布目正直	黒	黒	2~2.5mmの褐色砂粒を含む	
112	土師器	井 口縁部	A区DSI層					不明	布目正直	黒	黒	1mm以下の褐色砂粒を含む	風化著しい
113	土師器	井 口縁部	A区II層					不明	布目正直	黒	黒	1mm以下の褐色砂粒を含む	風化著しい
114	土師器	調査	A区II層					ナデ	布目正直	黒	黒	1mm以下の褐色砂粒を含む	
115	土師器	調査	A区DSI層					ナデ	布目正直	黒	黒	1mm以下の褐色砂粒を含む	
116	土師器	井 口縁部	A区II層					不明	不明	明赤褐	明赤褐	1mm以下の白色・灰褐色・透明褐色砂粒を含む	
117	土師器	底部	A区II層					ナデ	布目正直	黒	黒	3~6mmの黄灰色砂粒を含む	

第4表 井尻遺跡出土土器観察表(4)

報告書 番号	種類	器種	部位	出土地点	法 量(cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備 考
					口径	底径	高さ	外表面	内表面	外面	内面		
118	土師質 壺?	壺子	AKII層	最大径 3.9	最大幅 3.2	最大厚 1.9	不明	不明	浅黄緑	浅黄緑	1~2mmの黄色・褐色、無規則 黒色砂粒を含む	重量97.4g	風化著しい
119	須恵器 甕	胴部	AKDS II層				桔子目タキ	当て具痕	灰灰	灰灰	きめ細かい		
120	須恵器 甕	胴部	AKII層				平行タキ	平行當て具痕	圓灰	椭灰	きめ細かい		
121	須恵器 甕	胴部	AER表土				施釉(自然)、横方 施釉(自然)、横方 施釉(自然)、横方 施釉(自然)、横方	同心円文当て 具痕内文と平行 往ナダ	灰黄	灰白	1mm以下の灰白砂粒を少し含む		
122	須恵器 甕	胴部	AKII表土					当て具痕	黑褐	褐灰	きめ細かい		胎土の巻き目あり
123	須恵器 甕	胴部	AKDS II層				ナダ	ナダ	灰	灰	0.5~1mmの黒色、1mmの灰色 砂粒を少し含む		
124	須恵器 甕	胴部	AKDS II層				ナダ	ナダ	灰	灰	1~2mmの黒色砂粒を含む		
125	須恵器 甕	胴部	AKDS II層				桔子目タキ	当て具痕	圆灰	褐灰	きめ細かい		
126	須恵器 甕	胴部	AKDS II層				桔子目タキ	当て具痕	灰	灰	きめ細かい		
127	須恵器 甕?	胴部	AKDS II層				施釉(自然)、桔子 目タキ	当て具痕	灰黄褐	灰黄褐	きめ細かい		
128	須恵器 甕	胴部	AKDS II層				施釉(自然)、桔子 目タキ	当て具痕	灰黄褐	灰黄褐	きめ細かい		
129	須恵器 甕	底部	AKSE				付着物有り	ナダ	灰褐	褐	きめ細かい		
130	土師器 甕	口縁部	BKEP7	16.8			ナダ、段状工具に よる凹凸有り	ヨコナダ、ナダ	灰	灰	2mm以下の灰色砂粒を含む		
131	土師器 甕	口縁部	BKE II層				ヨコナダ	ヨコナダ	灰白	灰白	1mm以下の暗灰色砂粒を含む		
132	土師器 甕	口縁部	BKE8				不明	不明	浅黄緑	浅黄緑	1mm以下の黑色、灰色砂粒を含む	風化著しい	
133	土師器 甕	底部	BKE III層	4.8			不明	不明	におい穢	灰白	3mm以下の灰白砂粒を含む	円錐状の灰白付き、風化著し い。	
134	土師器 甕	底部	BKE8	4.6			ナダ	ナダ	浅黄褐	浅黄褐	きめ細かい		
135	土師器 甕	底部	BKEP7	6.4			回転ナダ、ヘラ切り	不明	浅黄褐	浅黄褐	きめ細かい	風化著しい	
136	土師器 甕	体部 ～ 底部	BKEP7	7.3			回転ナダ、ヘラ切り 後ナダ調整	不明	浅黄緑	浅黄緑	きめ細かい		
137	土師器 甕	体部 ～ 底部	BKEP8 II層	7.8			回転ナダ、ヘラ切り 後ナダ調整	不明	におい穢	浅黄緑	きめ細かい	風化著しい	
138	土師器 甕	体部 ～ 底部	BKEP7	7.3			回転ナダ、ヘラ切り 後ナダ調整	回転ナダ	におい穢	におい穢	きめ細かい	内面に墨の痕跡	
139	土師器 甕	底部	BKE7 III層	8.6			回転ナダ、ヘラ切り 後ナダ調整	回転ナダ	におい穢	におい穢	きめ細かい		
140	土師器 甕	底部 ～ 底部	BKE II層	8.8			回転ナダ、ヘラ切り 後ナダ調整	回転ナダ	淡緑	明褐灰	きめ細かい		
141	土師器 甕	底部	BKE II層+ 玉壁	8.8			回転ナダ、ヘラ切り 後ナダ調整	回転ナダ	におい穢	におい穢	きめ細かい	内面に墨の痕跡	
142	土師器 甕	口縁部	BKE8				回転ナダ	回転ナダ	浅黄緑	におい穢	0.5mm以下の彩色砂粒を含む		
143	土師器 甕	胴部	BKE-II				不明	布目正底	におい穢	5mm以下の灰色砂粒を含む	風化著しい		
144	土師器 甕	胴部	BKEP7				不明	布目正底	におい穢	におい穢	1mm以下の砂を含む		
145	土製品 土鰐		BKE II層	最大径 (4.6)	最大幅 3.0	最大厚 (1.4)	直21.3g						
146	土製品 甕	体部 ～ 底部	BKE8	9			回転ナダ、ヘラ切り 後ナダ調整	回転ナダ	におい穢	におい穢	黒鉛を白色、黒色砂粒を含む	表面外側に墨書きあり	
147	陶器 捏ね	口縁部	BKE III層	30.6			横方向のナダ、口 脇部に凹凸開 口ナダによる横方向 のナダ	ナダ	灰	灰	3~5mmの黒色砂粒、無組織な白 色砂粒を含む	理工中の砂・マンガンにより 黒色砂粒を含む	
148	陶器 捏ね	口縁部	BKE II層				横方向のナダ、口 脇部に凹凸開 口ナダによる横方向 のナダ	ナダ	灰	灰	無組織な白色砂粒を含む	理工中の砂・マンガンにより 黒色砂粒を含む	
149	須恵器 萬古村 底部	底部	BKE II層	8.2			ヘラタキの裏面 方向のナダ	ナダ	灰	灰	無組織な白色砂粒を含む		
150	須恵器 甕	胴部	BKE西側土層				桔子目タキ	同心円文当て具痕	灰	灰	きめ細かい		
151	陶器 捏ね	口縁部	BKE P II層				施釉貯入	施釉貯入	におい穢	におい穢	きめ細かい		
152	陶器 捏ね	口縁部	BKE P III層				施釉	施釉	灰	灰	きめ細かい		
153	陶器 片口鉢	口縁部	BKE I 層				回転ナダ	回転ナダ	灰白	灰白	きめ細かい	注入口あり、焼けがされている	
154	陶器 瓶	底部	BKE I 层	4.8 (高台)			施釉貯入	施釉貯入	におい穢	におい穢	きめ細かい		

## 第3章 雀田遺跡の調査

### 第1節 調査の概要

雀田遺跡の調査対象地は、道路拡幅の幅8~20m、全長50mの約700m<sup>2</sup>である。本遺跡に最も近い地点の県文化課による試掘結果で、青灰色粘土層（後述するV層）から上の土層で3,000個/g以上のプラント・オ・パールが検出されており、今回の調査の目的を明褐色粘土層（同IV層）と青灰色粘土層の境界面での水田跡の検出ととらえた。

まず、水田ということから湧水が懸念されたため、調査区を「コ」の字に切るように、排水と土層断面観察を兼ねた幅1m、深さ1m~1.5mの溝を掘削した。その後、重機を使用して表土（現水田耕作土）から40cm~50cm下までを掘り下げた。その後は、周りの溝で土層断面を確認しながら、明褐色粘土層を数cmずつ薄く剥ぎ取る精査作業に終始した。

表土を除去した時点で、調査区の東側において北東から南西方向に流れていたと思われる幅約4.5mの溝状遺構（SE1）と、それに斜めに交差すると思われる幅約0.7mの溝状遺構（SE2）の2条が検出できた。SE1の埋土中に須恵器片1点と土師器片6点が出土したが、いずれも流れ込みであることと須恵器以外は全て風化の激しい小片のため、溝状遺構の時期については確定できなかった。

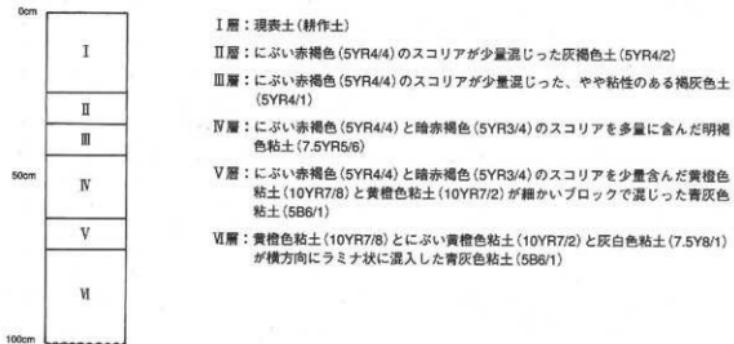
さらに、IV層にぶい赤褐色及び暗赤褐色のスコリアを多量に含む明褐色粘土を薄く剥いでいく中で下層のV層の青灰色粘土の高まりの筋を追い、畦畔検出を試みた。比較的IV層とV層の土色が似通っており、畦畔の検出は非常に困難であった。しかし、次第にスコリアを含んだ部分を剥ぐのとは違った感触で、しかも青灰色の強い部分が帯状に広がり始めた。これを畦畔状遺構としてとらえ、つないでいくと、前述の溝状遺構の南東側から5.0m×5.75m、北西側（調査区中央）から5.5m×4.6mと6.1m×4.0mの規模の区画を検出することができた。これらは十文字状のものや放射状の連結を呈する部分があった。サブトレンチを入れて断面を観察した結果、多くが畦畔としての高まりが見られた。しかし、時期を推定する土器や矢板などの木製品は全く出土しなかった。

### 第2節 基本層序

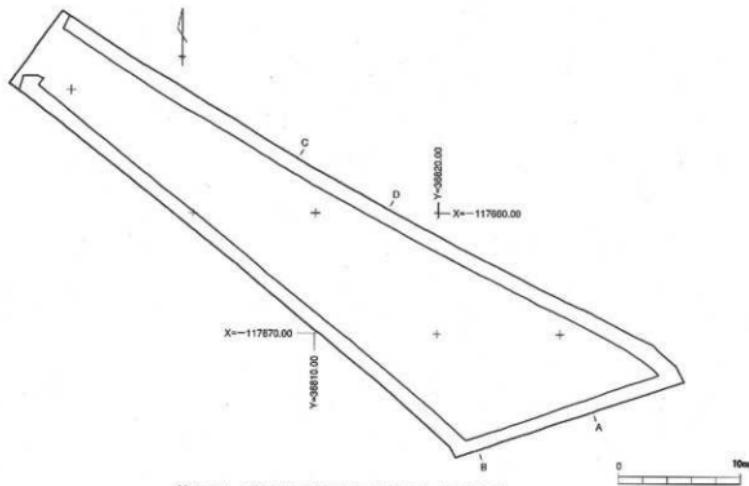
前述したように、この辺りは大淀川の氾濫によるシルト・粘土及び砂等の谷底低地堆積物で形成されている。

II層~V層にかけてにぶい赤褐色及び暗赤褐色のスコリアが混入しているが、特にIV層は多量に含まれている。また、V層はスコリアを少量含む青灰色の粘土であり、IV層とV層の境界がかなり巻き上がっている。これはこの面で水田耕作が行われたことを示す土層の一般的特徴であり、V層が水田耕作面と考えられる。IV層は平面的に見ると、高原スコリアと思われるにぶい赤褐色又は暗赤褐色のスコリアの明褐色粘土内への混入があまり均一でなく、畦畔検出を困難にさせる一因であった。

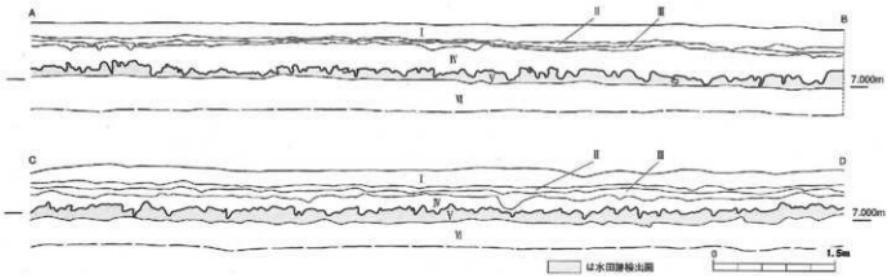
本遺跡の基本層序は以下の通りである。



第19図 雀田遺跡基本土層図



第20図 雀田遺跡調査区全体図（1/400）



第21図 雀田遺跡調査区土層断面図（1/60）

### 第3節 遺構および遺物

雀田遺跡では、溝状遺構2条と水田跡と思われる畦畔状の遺構を検出することができた。

#### 1 溝状遺構(第22図)

重機で表土下40cm~50cmを剥ぎ、現水田耕作土を除去すると、2条の溝状遺構が検出できた。

##### SE1

SE1は検出面の幅約4.5m、底面の幅約0.7m、検出面からの深さ約1mを計る。調査区の南東側に位置し、底のレベルから考えると北東から南西に向かって流れていたものと思われる。このSE1の埋土中（細分層した第7層の砂層中、第22図上参照）から須恵器片1点と土師器片6点が出土した。須恵器片は胴部、土師器片は極小片で風化が激しいものであった。さらに、これらの遺物は流れ込みと思われるため、このSE1の時期を決定するには至らなかった。また、溝状遺構の形状が直線的なこと、土層断面の観察では水平堆積を示すことなどから、人工的なものか自然流路的なものか断定しがたい。また、これが、後述する水田跡に関連するものかについても、調査区が狭かったこともあり、断定しがたい。

##### 須恵器(第23図)

甕の胴部片である。外面には平行タタキ、内面には明瞭な同心円文の當て具痕が認められる。

##### SE2

SE2は検出面の幅約0.7m、底面の幅約0.2m、検出面からの深さ約0.2mの溝で、SE1と斜めに交差すると思われるものである。また、SE1同様北東から南西に向かって流れていたものと思われる。この溝状遺構からは遺物は全く出土していない。また、SE1との先後関係も不明である。

#### 2 水田跡(第22図)

IV層を精査していくと、下層のV層との境で、前述のSE1の南東側（畦畔1）と北西側（畦畔2）に畦畔状遺構を検出できた。

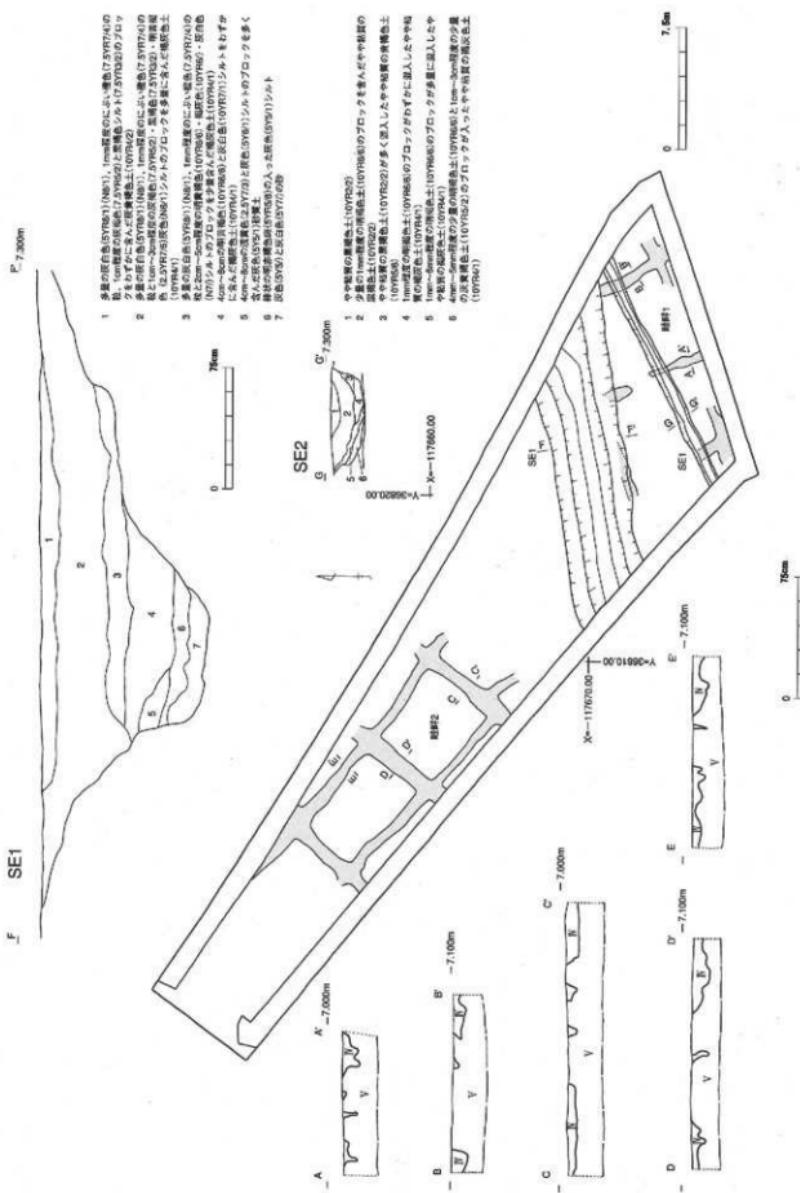
##### 畦畔1

最大幅75cm、最小幅30cmで、十文字状のものが1ヶ所、放射状のものが1ヶ所、直線状が3ヶ所検出できた。完全な水田区画として連結しなかったが、およそ5.0m×5.75mの区画が1枚認められる。

##### 畦畔2

最大幅125cm、最小幅45cmで、十文字又はあみだ状に畦畔が連結しており、およそ6.1m×4.0mの区画と5.5m×4.6mの区画の2枚が認められる。

第22図 鶴田遺跡縦横平面図 (1/300), 溝状遺構断面図 (1/30), 墓群断面図 (1/30)





第23図 雀田遺跡 S E 1 出土遺物 (1/3)

#### 第4節 小結

雀田遺跡の主目的が水田跡の検出であり、IV層とV層の境で、色や手触り、土層断面の観察などから水田の畦畔跡と考えられる遺構を検出できた。しかし、残念ながら第5章にあるとおりプラント・オパール分析による裏付けはできなかった。しかし、この点に関しては、次のように考えられる。

まず、前述のように、この遺跡の道路を挟んで向かい側の地点の県文化課による試掘結果で、V層の青灰色粘土層から上の土層で3,000個/g以上のプラント・オパールが検出されている。また、後述する沖ノ田遺跡においてもほぼ同じ面で、しかも、区画の大きさがほぼ同じ水田跡が検出でき、イネのプラント・オパールを多量に検出している。これらのことを考えあわせると、今回検出した水田跡は、畦畔で区画を作ったものの何らかの理由で畠作が行われなかつたものと思われる。

また、区画の大きさからすると古代の水田の大きさに類似している。土器や矢板などの木製遺物が出土しておらず、遺物からの時期の特定はできない。IV層のスコリアが高原スコリアであることから、古代から中世頃の水田跡と推定される。

今回の調査で遺跡の明確な意味づけを行うことができなかつたが、今後類例等を調べていきたい。

(南中道)

## 第4章 沖ノ田遺跡の調査

### 第1節 調査の概要

沖ノ田遺跡は、宮崎市大字跡江字沖ノ田の標高約7mを計る冲積地に位置する。工事によって影響を受ける範囲について、平成11年度に文化課が行った試掘調査の結果、土中よりプラント・オパールが5,000~20,000個/gと多量に検出され水田包蔵の可能性が想定されたことから本調査を行うこととなった。プラントオパールの密度はピークが2カ所確認され、当初より2時期の水田遺構の可能性が予想された。本調査は、平成12年4月27日から同年7月19日まで実施した。工事範囲の西側では表土下に二次堆積アカホヤ（水成）が、東側ではラミナ層が確認され水田土壤の残存の可能性が薄いと判断され調査から除外した。調査区は、現状の水田耕作に支障を及ぼさないように水路・農作業道をさけて西からA・B・Cの3区に設定した。調査は、外周に排水溝掘削を施し調査地内の水分を十分に乾燥させた後着手した。まず、重機により表土剥ぎを行い、統いてジョレンを使用しての精査を繰り返した。その結果、高原スコリア下約10cmと約35cm下で2時期の水田耕作面とそれに伴うと考えられる畦畔が検出された。

### 第2節 基本層序

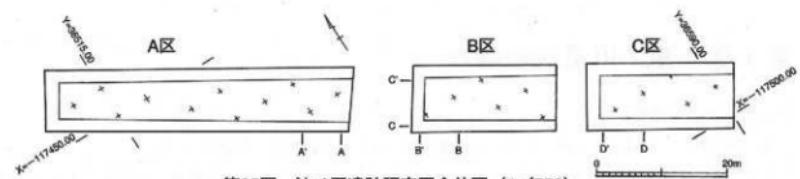
層序は大きくⅠ層からV層に分層できた。水田跡を細かく観察するためⅠ層の耕作土を除いてスコリアや酸化鉄の混入密度等からそれぞれについて細分を行った。古代以降継続的に行われた水田耕作が、前の時代の水田耕作層を攪拌しているため、各層の境界は不明瞭な状態であった。

沖ノ田遺跡の水田土壤内で確認された火山灰は、霧島高原スコリア（11~13世紀）と桜島文明軽石（1471 [文明3] 年噴出、通称「文明の白ボラ」）の2種類である。土層の最下部には、水成堆積と考えられる二次アカホヤが厚く堆積しており、その上層に泥炭層が形成されている。

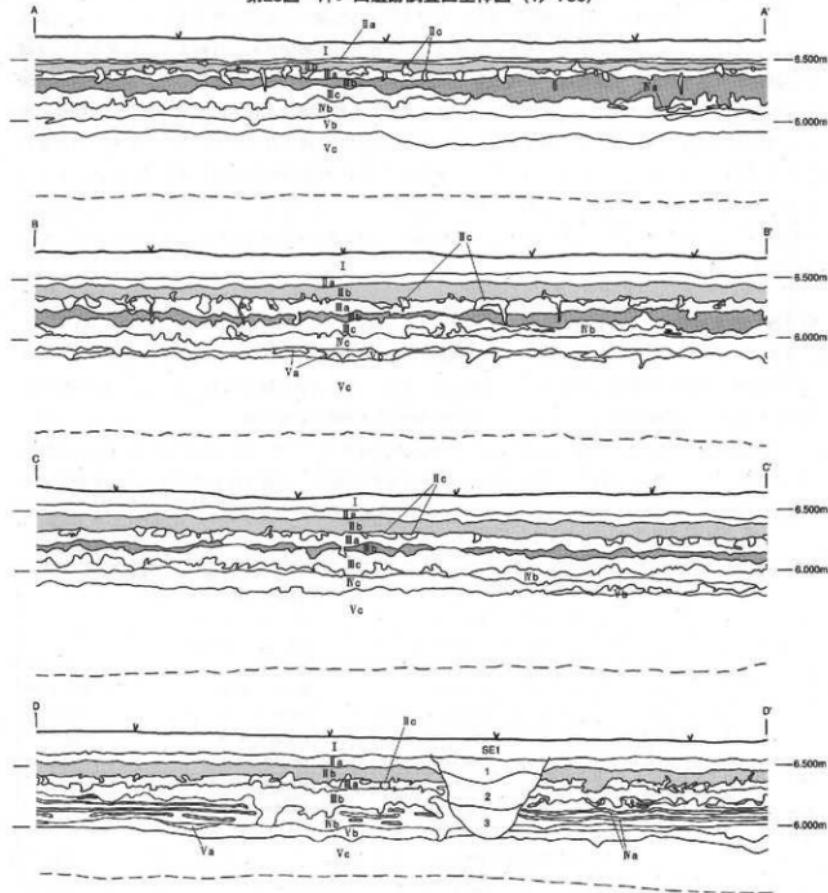
層序	土色	土質	混入物	水田土壤	備考
I	耕作土	シルト	文明軽石(少額)	○	
IIa	明褐色土	Hue.7.5YR5/6	シルト	高原スコリア(少額)	○
IIb	褐色土	Hue.10YR5/1	シルト	高原スコリア(下部に多い)	○
IIc	明褐色土	Hue.7.5YR5/8	スコリア		高原スコリア
IIIa	黒褐色土	Hue.10YR2/2	シルト	酸化鉄・マンガン核	○
IIIb	褐灰色土	Hue.10YR4/1	粘質シルト	酸化鉄・マンガン核	○
IIIc	黒褐色土	Hue.10YR2/2	粘質シルト	酸化鉄・マンガン核	○
IVa	黄灰色土	Hue.3.5Y5/1	粘質シルト・泥炭	植物遺体・炭化物	グライ化
IVb	黒色土	Hue.7.5Y2/1	粘質シルト・泥炭	植物遺体・炭化物	グライ化
IVc	褐灰色土	Hue.7.5Y5/1	粘質シルト・泥炭	植物遺体・炭化物	グライ化
Va	黒色土	Hue.7.5Y2/1	砂質シルト	二次アカホヤ殻	
Vb	暗灰黄色土	Hue.2.5Y2/1	砂質シルト		二次アカホヤ
Vc	暗灰黄色土	Hue.2.5Y5/2	砂質シルト		二次アカホヤ

第24図 沖ノ田遺跡基本土層図

第5表 沖ノ田遺跡土層注記表



第25図 沖ノ田遺跡調査区全体図 (1/750)



1 暗褐色土(10YR3/3),シルト質。酸化鉄分少量混入。1mm程度の文明ボラ粒・高麗スコリア粒をまばらに混入する。しまりがある。

2 暗褐色土(10YR3/3)、質地シルト。酸化鉄分多量混入。1mm程度の文明ボラ粒を混入し基本土層Ⅲaブロックを多量に混入する。しまりがある。

3 黒褐色土(10YR3/2)、粘土。鉄化鉱分まばらに混入。基本土層ⅡaブロックとV層のラミナのブロックを混入する。やわらかい。

は水田跡1検出面  
は水田跡2検出面

A horizontal number line starting at 0 and ending at  $2m$ . There are tick marks at 0, 1, and  $2m$ .

第26図 沖ノ田遺跡調査区土層断面図 (1/40)

### 第3節 水田跡1の調査

#### 水田跡1(第27図)

試掘調査時のプラント・オパール分析の結果、高原スコリアを含む第Ⅱ層の下、第Ⅲ層上位よりイネのプラント・オパールが5,000個/g程検出されたため、第Ⅲ層での水田面の検出を目指した。水田面に影響を及ぼすのを防ぐため、重機による掘削は、第Ⅱ層の中位までとし、それ以降は人力による掘削と精査を繰り返した。梅雨時期の長雨や水路から流れ込む水により精査中に調査区がたびたび冠水にみまわれた。

調査の結果、Ⅱ b層の最下部からⅢ a層が筋状に見られる箇所があったものの、はっきりと畦畔として捉えられたのはⅢ a層上位面であり、A区で4本・B区で2本・C区で2本が検出された。畦畔の方位はおよそN34°E付近である。B区の西側では、人や家畜の足跡痕跡が密に入っています。慎重に精査を繰り返したが、畦畔を捉えることはできなかった。検出された畦畔は幅約50~70cmを計りN44°Eに延びている。畦畔同士の間隔はA区、C区とともに約8mを計る。畦畔は土止めをかねた土盛りであったと考えられ、杭や矢板等の施設は確認できなかった。B区において、地形の傾斜の高い部分と低い部分の境を利用して畦畔を設定していると推定される箇所も見られた。調査区の南北幅が6mであり、この範囲内では東西方向の畦畔を捉えていない。区画は、調査区外へも広がっており、水田1枚あたりの面積は、48m<sup>2</sup>以上であるが正確な面積は不明である。耕作面には、牛と考えられる足跡痕が見られた。踏み込み痕の方向性は確認できなかった。埋土にはⅡ層上部の高原スコリアを含む土が多く混入していることから、上層からの踏み込みと考えられ、水田と同時期というよりはそれより上位の層からのものと考えられる。

#### 遺物(第29図)

遺物は、Ⅲ b層上面での出土で、量的には少量である。160は、東播系の捏鉢である。161は備前の擂鉢で口縁の外面が未発達であり、内面には9本一単位の条線がみられる。

#### 1号溝状遺構(第27図)

C区西側で、畦畔を切り南北方向に延びている。幅70cm、深さ60cmを計る。

#### 遺物

溝状遺構の埋土中から銅版印刷の磁器片などが出土している。

#### 第4節 水田跡2の調査

##### 水田跡2(第28図)

水田跡1の下、第Ⅲcで、10,000個/gを超える量のプラント・オパールが検出された。第Ⅲb層は厚さが5~10cm程と薄く、慎重に耕作面を平滑にするよう精査を行った。しかし、第Ⅲc層は下部の第Ⅳ層で層の巻き上げが著しく、平面的に筋状に見える箇所があり、畦畔との区別が困難な部分があった。そのため第Ⅲc層を耕作面とする畦畔を検出したが、基部での確認となった。

A区西側部分では、調査対象とするⅢb層の堆積が薄く、流失して残存していない箇所も認められ、C区についても調査対象とするⅢb層自体が薄く、残存していない箇所も見られ、東にいくほどⅣ層のラミナ層が厚く堆積している状況が顕著に確認できた。このことから、A区の西側およびC区の多くの部分については水田遺構の残存の可能性は低いと判断されたためと、期間的な問題等から、調査対象からは除外し、A区東側からC区西側までの比較的土層堆積状況が安定している部分に絞って調査を行った。

調査の結果、A区東側について、畦畔に囲まれた耕作面と考えられる約13枚の区画を確認した。そのうち中央部の3区画がほぼ同規模である。検出された中では最小の区画となるが、面積は約9m<sup>2</sup>である。西側の3枚については、筋状の畦畔の一部はラミナ状の筋となり不明瞭であった。畦畔は、土圧による沈下や冠水による精査の繰り返し等により基底部での確認となった。

畦畔の下端幅は30cm~90cm、残存する高さは3~5cmを計る。全て、杭列などの補強は見られず盛土のみで構築されていた。その中で、畦畔の筋が部分的に途切れる箇所が見られ断面観察の結果、水口の可能性が認められた。畦畔の水口は、調査区内で1カ所に確認されたのみであった。

B区については、様相がA区と異なっている。A区が比較的整然と区画が形成されているのに対して、B区では畦畔の方向性や幅・区画の形状に大きくばらつきがある。畦畔の方向は、およそ地形には沿っているが、蛇行したり、途切れたりと一定せず、幅も20cm~180cmで、囲われる区画も不定形である。このことは、土圧による影響や基底部ぎりぎりでの確認の結果による可能性もある。平面的には水口と推定される箇所も見られたが、断面観察では立ち上がりは確認できなかった。

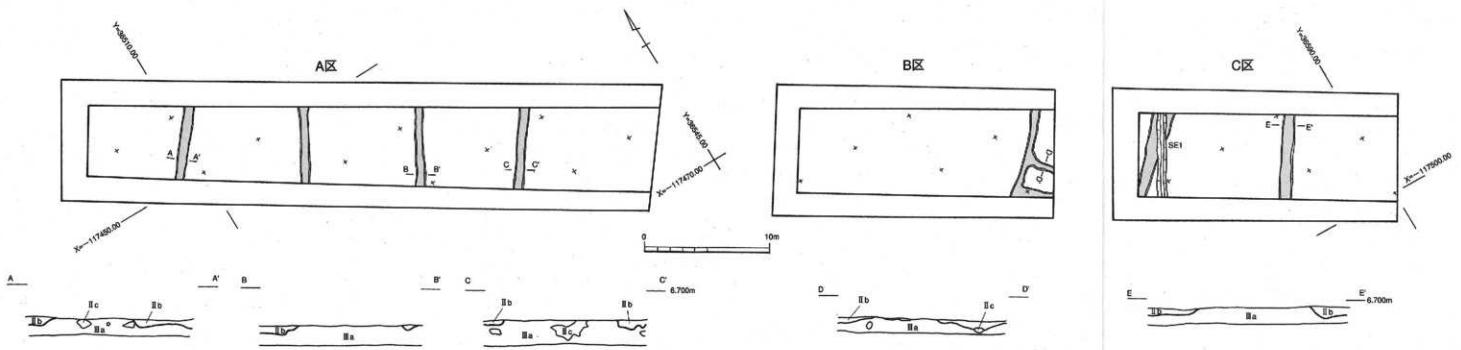
##### 遺物(第29図)

遺物の出土は少量であり、そのほとんどが摩耗した小破片である。156は、高環の環部と脚部の間の接合部分である。157は、甕で口縁部が短く外反する。158は甕で底部はヘラ切り。159は、黒色土器B類の壺である。

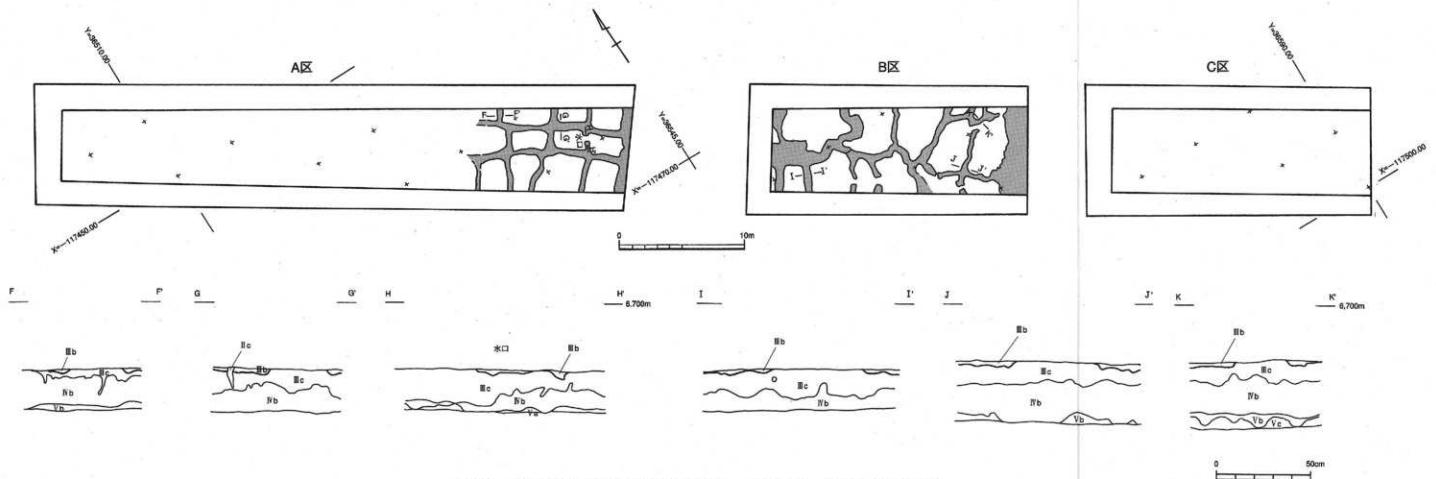
#### 第5節 その他の遺物(第29図)

ここでは水田跡1上層のI層の掘り下げ中に出土した遺物についての記述を行う。

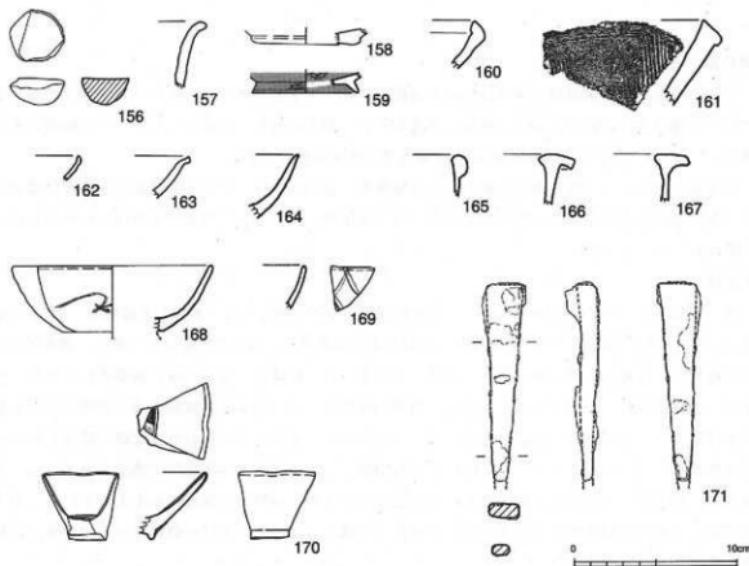
162は白磁で口縁上部がやや内傾する。163は、B区出土の磁器碗である。口縁部は外反し、内面に段をもち上方へ拡張される。165は肥前系の甕で口縁が玉縁状を呈する。166と167は、口縁がT字状を呈する陶器の甕で同一個体の可能性もある。168と169は、染付碗で168は外面に折れ松葉文が、169は二重網目文がみられる。170は皿で、口縁が稜花となる染付青磁である。見込みには文様が描かれている。高台内は透明釉で疊つきには釉がみられない。171は、断面が長方形で、最大長12.3cm、最大幅2.7cm、最大厚1.05cm、重さ65.8gを計る。用途不明の鉄製品である。



第27図 沖ノ田遺跡 水田跡1平面図(1/300), 検出畦畔断面図(1/20)



第28図 沖ノ田遺跡 水田跡2平面図(1/300), 検出畦畔・水口断面図(1/20)



第29図 沖ノ田遺跡出土遺物実測図 (1/3) (156~159は水田跡2)  
(160~161は水田跡1)

遺物番号	種別	器種	地 点	法 量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 質		歯土の特徴	備考
				部位	高さ	口径	底径	裏高	外 面	内 面		
156	土解器	高杯 火鉢	B区水田跡2						ナデ	ナデ	に赤い褐色 (SYR7/4)	光沢のある1mm以下の透明粒、 1.5mm以下の細い粒を含む
157	土解器	火鉢	B区水田跡2						ナデ	不明	灰白色 (2.5YR8/7)	2mm以下の灰色・赤褐色砂粒 を含む。
158	土解器	杯 火鉢	A区水田跡2		6.6 (推定)				ナデ	ナデ	に赤い褐色 (2.5YR7/4) 透明感有り (2.5YR8/7)	に赤い褐色 2mm以下の赤褐色砂粒がみ られる。
159	黑色土器	高台付焼	B区水田跡2		6.7 (推定)				ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	黒色 (N 2/1)	精良
160	陶器	埋 口縁部	A区水田跡1						ナデ 自然釉	ナデ	灰白色 (N 6/1)	精良
161	陶器	縁	C区水田跡1						ナデ	ナデ	淡黄褐色 (7.5YR8/7)	1mm以下の乳白色粒、黒色 粒を含む
162	白磁	瓶 口縁部	A区						施釉・貫入	施釉・貫入	淡黄色 (2.5Y8/3)	精良
163	磁器	瓶 口縁部	B区						施釉	施釉	灰オーライブ (3Y6/2)	精良
164	磁器	瓶 口縁部	C区						施釉	施釉	灰白色 (10Y8/1)	精良
165	磁器	瓶 口縁部	C区						施釉 貫入	施釉 貫入	淡黄色 (2.5Y8/7)	精良
166	陶器	壺 口縁部	A区						施釉	施釉	暗赤褐色 (SYR2/3)	精良
167	陶器	壺 口縁部	C区						施釉	施釉	暗赤褐色 (SYR2/3)	精良
168	磁器	瓶	B区	12.2 (推定)					染付 折れ松葉文	施釉 見込み施削ぎ	灰白色 (10Y7/1)	精良
169	磁器	瓶 口縁部	B区						染付 二重綱口文	施釉	灰白色 (5G8/1)	精良
170	磁器	瓶	C区						青緑 絞花	青緑 絞花	緑灰色 (SG6/1)	精良

第6表 沖ノ田遺跡出土土器観察表

## 第6節 小結

沖ノ田遺跡では、試掘調査時の自然科学分析の結果、イネのプラント・オバールが第Ⅰ層から第Ⅳ層にかけて確認され継続的な水田の利用が考えられた。調査の結果、高原スコリア下で2時期の水田面を確認し、これらはおおよそ古墳時代から中世までの時期が推定できる。

低湿地で粘質土中での水田跡の検出という状況や、高原スコリア下での2時期の水田面の確認という点で友尻遺跡の成果と共通するものがある。以下水田跡1・2について調査により得られた知見について簡略ながらまとめを行う。

### 水田跡1

Ⅲ a層上位にて8条の畦畔を検出し、約9枚以上の水田を確認した。検出した畦畔は、幅50~70cmを計り、南北方向に延びている。畦畔同士の間隔は約8mを計り、面積は48m<sup>2</sup>以上である。調査区の設定上の問題から、区画の規模を推定することはできなかった。畦畔は、盛土のみで構築されており、杭や矢板等の補強材は見られなかった。水田は、最近の研究から11~13世紀に霧島火山より噴出したと指摘される高原スコリアの直下で確認されている。水田面には、牛のものと思われる足跡が確認されたものの方向性などは認められなかった。この時期の水田跡は、前田遺跡・友尻遺跡で確認されている。前田遺跡では、10世紀代の土師器が検出され、友尻遺跡では古代・中世の土師器片が出土している。沖ノ田遺跡では、土層の堆積状態や出土遺物からこれら2遺跡とほぼ同じ、古代の終わりから中世までの耕作が考えられる。

### 水田跡2

水田跡1の下、Ⅲ b層においてA区で、東西方向と南北方向の畦畔に挟まれた面積約9m<sup>2</sup>の小規模の水田区画13枚以上と1カ所ではあるが水口と考えられる箇所が確認された。一方B区では、おおよそ東西方向や南北方向ではあるが、蛇行したり途切れたりと規格性が見られない畦畔と不定型な区画を検出した。当初区画の形状から休耕田との指摘もあったが、畦畔検出後のプラント・オバール分析ではむしろA区より多量のイネが検出される結果となった。ただし、畦畔の上部でもほぼ同量のプラント・オバールが検出されており、畦畔の作り替えや畦塗りの可能性も指摘されている。

区画の形状は、畦畔最下部での検出の結果によるものか、本来の水田面が緩やかな棚田状を呈しており段差をとらえきれなかったのか土圧による沈下によるものか判然としなかった。畦畔は、水田跡1と同様土盛りにより構築されており、杭や矢板などの出土は見られなかった。出土した遺物が少量で時期の特定は難しいが、古墳時代から古代までの時期が推定される。

(橋本)

## 第5章 自然科学分析の結果

3遺跡とも、自然科学分析を株式会社古環境研究所に委託した。分析は発掘調査で検出した水田面の土壤に含まれる有機物の放射性炭素測定による暦年代の測定と水田耕作の確認および稻穀の生産量推定のためのプラント・オパール分析の2つについて行った。以下は、分析結果についての抜粋である。

(南中道)

### 1 放射性炭素年代測定

各遺跡の放射性炭素年代測定によって出された暦年代値は、以下の通りである。

遺跡名	地点・層順	補正 <sup>14</sup> C年代 (年BP)	暦年代(西暦)	測定No Beta-
・井尻遺跡	B区 III 層	2450±70	交点: cal BC525 1 σ : cal BC770~405 2 σ : cal BC795~390	139534
・雀田遺跡	V 層	4240±70	交点: cal BC2885 1 σ : cal BC2905~2865, 2800~2760 2 σ : cal BC3005~2975, 2935~2620	139535
・沖ノ田遺跡	A区 II b 層	1200±60	交点: cal AD810, 840, 860 1 σ : cal AD770~900 2 σ : cal AD680~980	145578
・沖ノ田遺跡	A区 III c 層	2710±60	交点: cal BC830 1 σ : cal BC910~810 2 σ : cal BC990~790	145580

これらの暦年代値は土壤が生成された当時の年代を示すものであり、遺構の年代とは必ずしも一致しないと考えられる。水田跡の正確な年代については、土器による編年観と合わせて総合的に検討する必要がある。

### 2 プラント・オパール分析

プラント・オパール分析のための試料は、井尻遺跡の遺構検出面から採取された28点、雀田遺跡の基本土層断面や遺構検出面から採取された18点、沖ノ田遺跡の基本土層断面や遺構検出面から採取された53点である。試料採取箇所は各遺跡の図を参考にされたい。(第30~32図)

以下は、各遺跡のイネの検出密度結果及び堆積当時の環境(乾燥・湿润)を推定することができるヨシ属・ススキ属・タケア科の検出密度結果と考察である。

## (1) 井戸遺跡

### <遺構検出面>

井戸遺跡の発掘調査では、霧島高原スコリア（11～13世紀）直下から畦畔状遺構が検出された。ここでは、同遺構検出面から採取された計28試料について分析を行った。その結果、これらのすべての試料からイネが検出された。

このうち、調査区中央付近の6試料（試料15、31、32、33、34、35）では密度が5,000個/g以上と高い値であり、調査区北端（山際）などを除く16試料（試料c、5、7、9、11、17、19、21、23、25、26、27、28、29、36、37）でも3,000個/g以上と比較的高い値である。また、全体の平均でも3,700個/gと比較的高い値である。以上の結果から、同遺構では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

井戸遺跡の遺構検出面について、そこで生産された稻穀の総量を算出した（層厚を10cmと仮定）。その結果、面積10a（1,000m<sup>2</sup>）あたり約3,800kgと推定された。当時の稻穀の年間生産量を面積10aあたり100kgとすると、同水田層ではおよそ40年にわたって稻作が営まれていたと推定される。

ただし、これらの値は収穫が穗刈りで行われ、稻わらがすべて水田内に還元されたと仮定して算出しているため、収穫が株刈りで行われて稻わらが水田から持ち出された場合は、その割合に応じて修正を行う必要がある。

### <堆積環境の推定>

イネ以外の分類群では、調査区中央付近を除くほとんどの試料でタケ亜科（おもにネザサ節）が多量に検出され、ヨシ属も全体的に比較的多く検出された。おもな分類群の推定生産量によると、調査区中央付近を中心にヨシ属が卓越しており、調査区北側（山側）などではタケ亜科が優勢となっていることが分かる。

ヨシ属やタケ亜科が当時の水田内に生育していたことは考えにくいことから、ヨシ属などが生育する湿地を利用して水田が造成されたことや、周辺に生育していたこれらの植物が堆肥や草木灰などとして水田内に持ち込まれたことなどが想定される。

## (2) 雀田遺跡

### <基本土層断面>

Ia層（試料1）からVib層（試料12）までの層準について分析を行った。その結果、Ia層（試料1）からII層（試料3）までの各層からイネが検出された。このうち、Ia層（試料1）とIb層（試料2）では、密度が5,000個/g以上と高い値である。これらは、現在もしくは比較的最近の水田耕作に由来するものと考えられる。

II層（試料3）では密度が700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稻作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。III層（試料4）からVib層（試料12）にかけては、イネはまったく検出されなかった。

#### <遺構検出面>

畦畔状遺構が検出されたV層およびその直上のIV層から採取された計6試料について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

#### <堆積環境の推定>

遺構検出面のV層およびその直上のIV層では、ヨシ属やタケ亜科（おもにネザサ節）が比較的多く検出された。おもな分類群の推定生産量によると、おむねヨシ属が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、各層の堆積当時はヨシ属などが生育する湿地の環境であったと考えられ、周辺の台地部などではネザサ節などのタケ亜科も生育していたと推定される。

#### (3) 沖ノ田遺跡

##### <基本土層断面>

I層（試料1）からⅣ層（試料15）までの層準について分析を行った。その結果、I層（試料1）からⅣb層上部（試料12）までの各層からイネが検出された。このうち、現表土のI層（試料1、2）では、密度が11,600個/gおよび6,800個/gと高い値である。これは、現在または比較的最近の水田耕作に由来するものと考えられる。

Kr-ThS混のⅡb層（試料5）、Kr-ThS直下のⅢa層（試料6、7）、Ⅲb層（試料8）、Ⅲc層（試料9）の各層では、密度が11,400～13,600個/gとかなり高い値であり、Sz-3混のⅡa層（試料3）でも8,300個/gと高い値である。したがって、これらの各層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。Ⅳb層上部（試料12）では、密度が800個/gと低い値である。これは、直上のⅢc層からの混入と考えられる。

※註 Kr-ThS=霧島高原スコリア Sz-3=桜島文明軽石

#### <遺構検出面>

A区から採取された試料1～試料15、B区から採取された試料1～試料23の計38試料について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネが検出された。このうち、A区では密度が10,300～18,800個/g（平均14,600個/g）、B区でも11,600～23,800個/g（平均17,100個/g）といずれもかなり高い値である。したがって、これらの遺構検出面では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。なお、畦部でも水田面と同様にイネが多量に検出されることから、畦の作り替えや畦塗りが行われていたことが想定される。

Ⅲc層水田検出面について、そこで生産された稻穀の総量を算出した（層厚を10cmと仮定）。その結果、面積10a（1,000m<sup>2</sup>）あたり約16,700kgと推定された。当時の稻穀の年間生産量を面積10aあたり100kgとすると、同水田層では約150年間にわたり稻作が営まれていたことになる。ただし、これらの値は収穫が穗刈りで行われ、稻わらがすべて水田内に還元されたと仮定して算出しているため、収穫が株刈りで行われて稻わらが水田から持ち出された場合は、その割合に応じて修正を行う必要がある。

#### <堆積環境の推定>

基本土層地点では、IVb層より上位のほとんどの層準でヨシ属が多量に検出され、タケ亜科（おもにネザサ節）も比較的多く検出された。また、スキ属なども少量検出された。おもな分類群の推定生産量によると、IVb層より上位のほとんどの層準でヨシ属が優勢となっていることが分かる。

IIIc層水田検出面では、ほとんどの試料からヨシ属が多量に検出され、タケ亜科（おもにネザサ節）も比較的多く検出された。また、スキ属なども少量検出された。おもな分類群の推定生産量によると、ほとんどの試料でヨシ属が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、稻作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属などが繁茂する湿地の状況であったと考えられ、IIIc層の時期にそこを利用して水田稻作が開始されたと推定される。また、周辺の丘陵部などにはネザサ節などのタケ亜科も分布していたと考えられる。なお、稻作の開始以降もヨシ属が多く見られることから、水田雜草などとしてヨシ属が生育していたことや、周辺に生育していたこれらの植物が堆肥や草木灰などとして水田内に持ち込まれたことなどが想定される。

#### (4) 考察

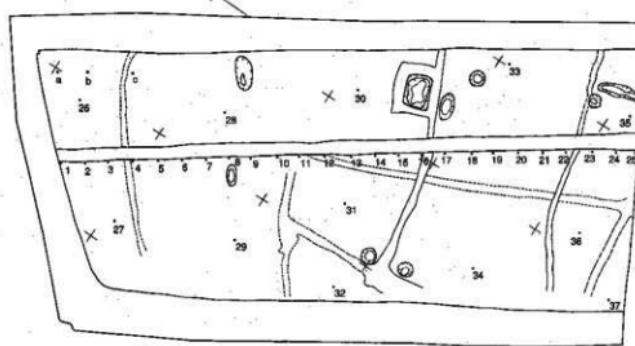
プラント・オパール分析の結果、畦畔状遺構が検出された井戸遺跡の霧島高原スコリア直下検出面からは、イネが多量に検出され、同遺構で稻作が行われていたことが分析的に検証された。同検出面では、調査区のほぼ全域で稻作が行われていたと推定される。

雀田遺跡の遺構検出面では、いずれの試料からもイネが検出されず、稻作が行われていた可能性は認められなかった。同層の堆積当時はヨシ属などが生育する湿地の環境であったと推定される。

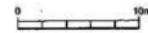
沖ノ田遺跡の畦畔状遺構が検出されたIIIc層検出面からはイネが多量に検出され、同遺構で稻作が行われていたことが分析的に検証された。同検出面では、調査区のほぼ全域で稻作が行われていたと考えられ、その耕作期間は約150年間以上にわたっていたと推定される。また、IVb層より上位では、すべての層からイネが多量に検出され、稻作が行われていた可能性が高いと判断された。本遺跡周辺は、稻作が開始される以前はヨシ属などが繁茂する湿地の状況であったと考えられ、IIIc層の時期にそこを利用して水田稻作が開始されたと推定される。また、その後もおおむね継続して水田稻作が行われ、現在に至ったものと推定される。

#### 参考文献

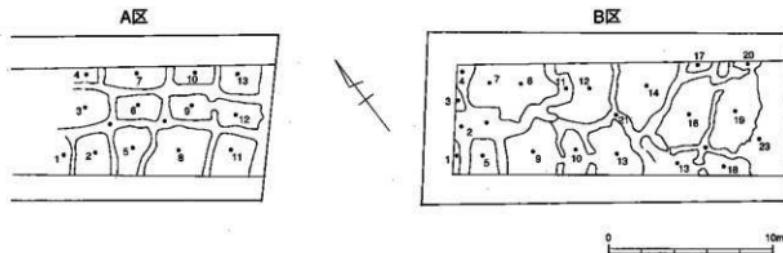
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）考古学と植物学 同成社， p.189-213  
杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追求のための基礎資料として—考古学と自然科学， 20， p.81-92  
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法。考古学と自然科学， 9， p.15-29  
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—考古学と自然科学， 17， p.73-85



第30図 井尻遺跡B区試料採取地点図 (1/400)



第31図 鶴田遺跡試料採取地点図 (1/400)



第32図 沖ノ田遺跡試料採取地点図 (1/300)



## 第6章 まとめ

主要地方道南俣・宮崎線道路改築事業に伴う井戸遺跡・雀田遺跡・沖ノ田遺跡の調査の成果について触れてまとめてみたい。井戸遺跡では、丘陵からの地形の傾斜を利用した棚田状の水田が考えられ土層断面にわずかに段差と考えられる部分が確認されたが、平面上で区画を確認するにはいたらば、同一平面上に異なる時期と考えられる畦畔を検出した。水田耕作面で9カ所の方形の掘り込みが確認された。遺物の出土は無く性格は不明である。前田遺跡に類例が認められる。一方丘陵側では、古代（9世紀末～10世紀）の所産と考えられる竪穴住居跡が確認され傾斜地という立地と、南側低地に営まれた水田跡との関わりが注目される。また雀田遺跡・沖ノ田遺跡では高原スコリア下で、区画の規模が小さい水田跡が確認された。大淀川下流域の冲積地での水田調査例は、多くはないが近年成果が蓄積され層序や水田跡の様相が徐々に明らかにされつつある。今回、水田調査の鍵となったのは、II層で検出された10～13世紀に霧島火山より噴出したと指摘される高原スコリアである。このスコリアの下位で水田跡を検出した事例としては内宮田遺跡・友戸遺跡・前田遺跡・町屋敷遺跡等がある。友戸遺跡では高原スコリアの下で2時期の水田跡が確認され、町屋敷遺跡では、古墳時代・古代・中世の3時期の水田跡が検出されている。

雀田遺跡で検出されたのは、平均面積約25m<sup>2</sup>と小規模な区画の水田である。水田面に伴う土器はほとんどなく、稻のプランツ・オバールも確認されていない。そのため時期の特定は困難であるが、友戸遺跡水田跡1と沖ノ田遺跡水田跡1の堆積層序や区画の規模等を比較するとこれらとほぼ同時期の可能性も推定される。沖ノ田遺跡の水田跡2に関しては、年代の指標となる火山灰もなく木製品等も出土していない。遺物としては、古墳時代の土師器や、古代の土師器片がごく少量出土したのみでいずれも摩耗した小片であり、水田耕作は古墳時代から古代の時期が推定される。また水田区画内のプランツ・オバール分析により、15,000～17,000個/g程イネがみつかっており、またヨシ属も多量に確認されていることから、湿地であった場所を水田として耕作した場合やヨシ属が耕作面に持ち込まれた可能性が考えられる。今回の調査では3遺跡とも、溝や畦畔の基軸線などは確認できず、水田跡の一断片のみを確認する結果となった。雀田遺跡のプランツ・オバールの問題や沖ノ田遺跡B区水田跡2の区画形状の問題など咀嚼しきれていない部分も残った。今後の調査例の増加をまって検討したい。

(橋本)

- 註（1）東憲章『前田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第9集 1998  
（2）奥野充「南九州の第四期末テフラの14C年代」（予報）『名古屋大学加速器質量分析計業績報告（Ⅷ）』 1996  
（3）和田理啓「高原スコリアについて」『荒追遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第11集 1998  
（4）高橋祐二「内宮田・塚田・清田追遺跡」東九州自動車道埋蔵文化財発掘調査概要報告書（西都～清式）1997  
平成12年度報告書刊行予定  
（5）川崎義巳「友戸遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第22集  
（6）平成12年度報告書刊行予定 水田の時期については崎田一郎氏のご教示  
（7）遺跡の水田面の時期については、確定的なことは言い難い（本書第4章第6節参照）

# 図 版

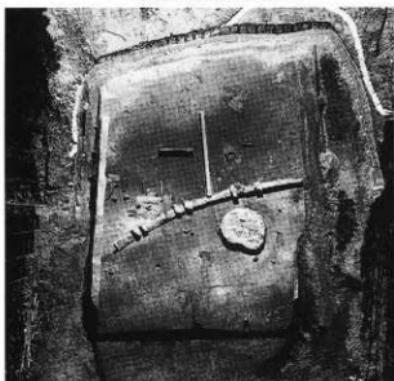
図版 1  
井尻遺跡



1 井尻遺跡遠景（東から）



2 井尻遺跡遠景（西から）



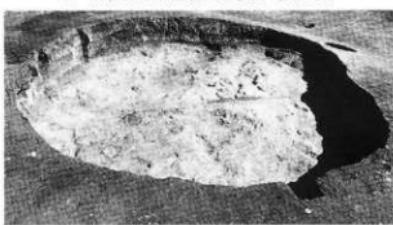
3 井尻遺跡A区



5 A区SA 1遺物出土状況（南から）



4 井尻遺跡A区西側土層断面

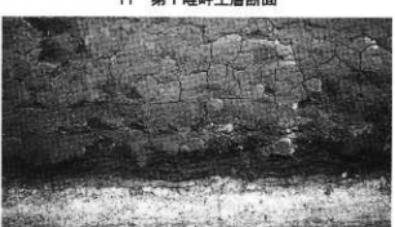
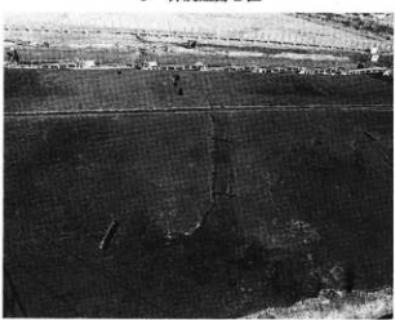


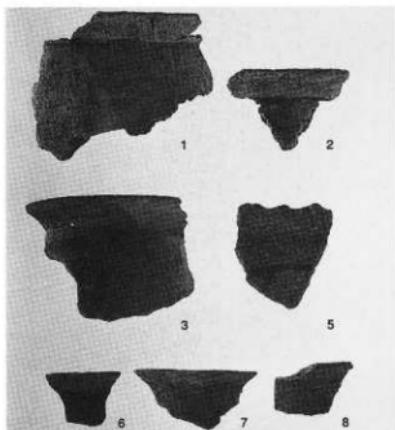
6 A区SA 1完掘状況（西から）



7 A区SZ 2遺物出土状況（南から）

図版2 井尻遺跡

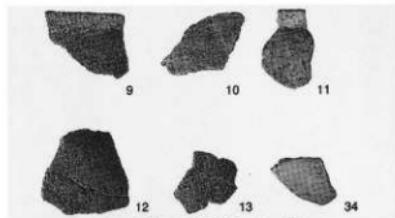




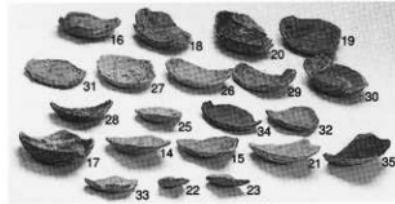
S A 1 出土土師器壺 (1)



S A 1 出土土師器壺 (2)



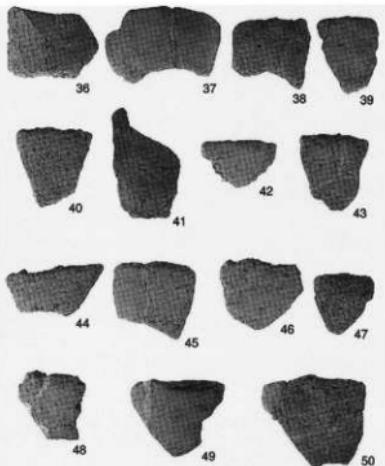
S A 1 出土土師器壺・杯 (34)



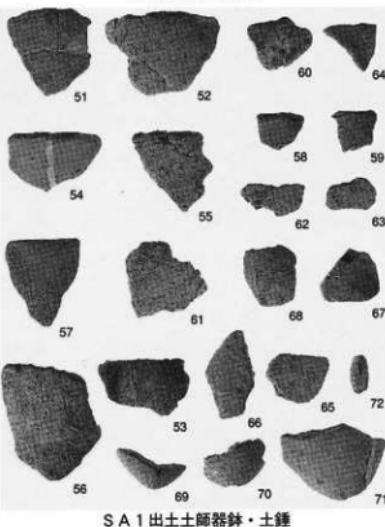
S A 1 出土土師器杯



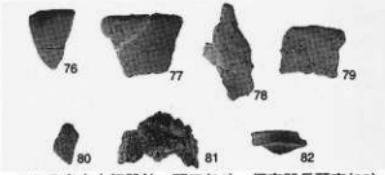
S Z 2 出土土師器杯



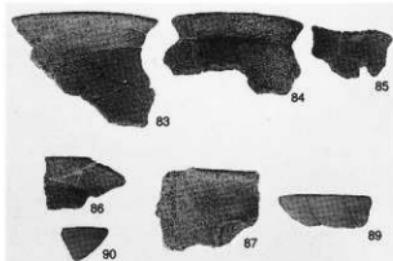
S A 1 出土土師器鉢



S A 1 出土土師器鉢・土錘



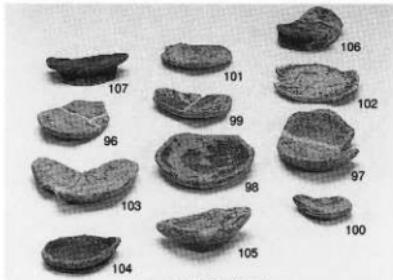
S Z 2 出土土師器鉢・羽口(81)・須恵器長頸壺(82)



A区出土土器器窓・坏 (89・90)



A区出土土器窓・坏 (88)



A区出土土器窓



A区出土土器鉢・杓子形土器 (118)



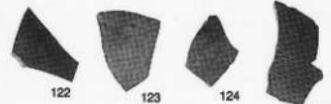
A区出土土器鉢



119

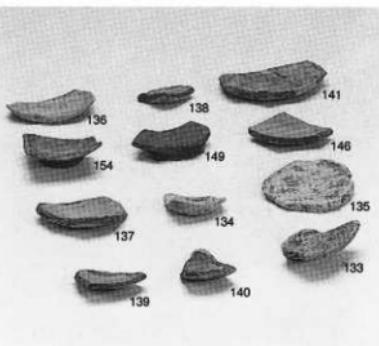
120

121



126

A区出土須恵器



B区出土土器



130

131

132

142



143

144

145

147



B区出土土器・須恵器(150)・陶磁器(151~153)



1 雀田遺跡遠景（南西から）



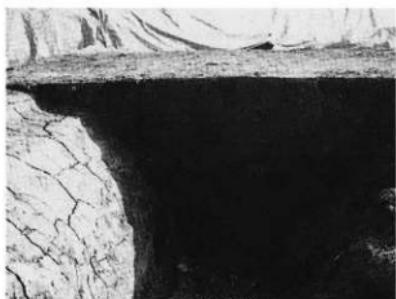
2 調査区全景



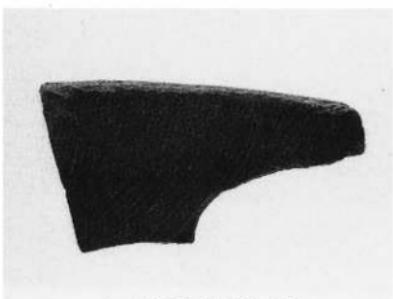
3 東側土層断面



4 水田跡（畦群1）



5 SE 1 土層断面

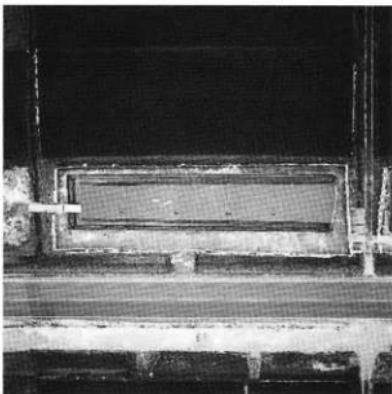


6 SE 1 出土須恵器（焼）

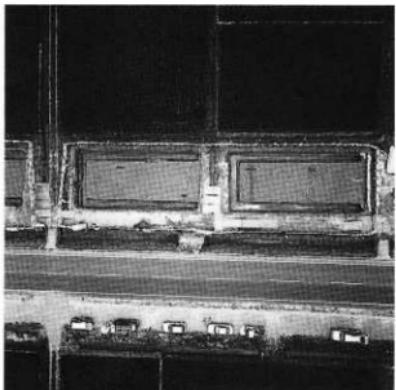
図版6 沖ノ田遺跡



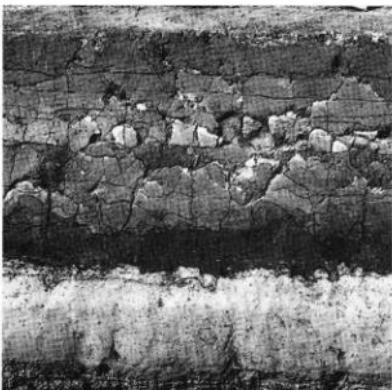
1 沖ノ田遺跡調査区全景



2 水田跡 1 (A区)



3 水田跡 2 (B・C区)



4 B区土層断面

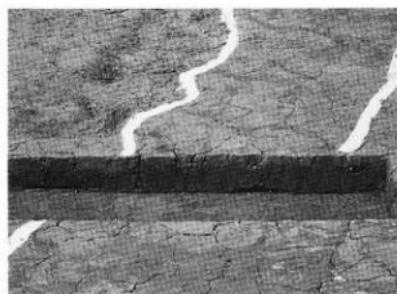


5 水田跡 2 (A区)

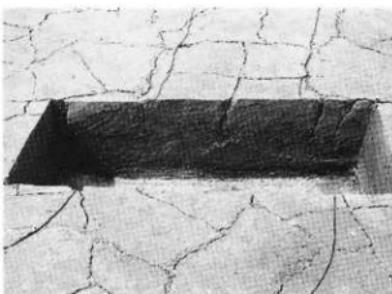


6 水田跡 2 (B区)

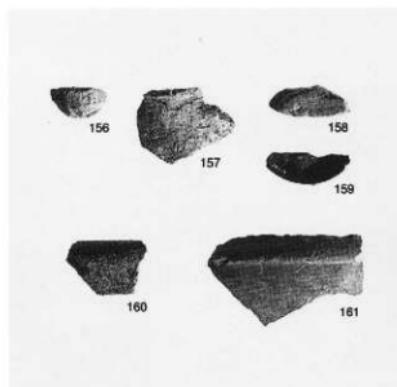
図版7 沖ノ田遺跡



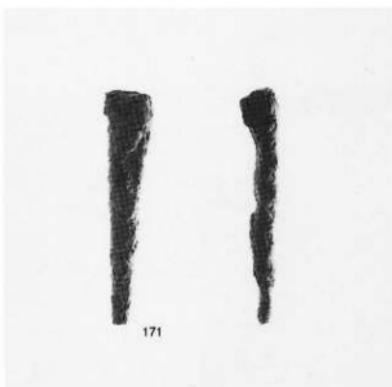
1 水田跡1鞋畔断面



2 水田跡2鞋畔断面

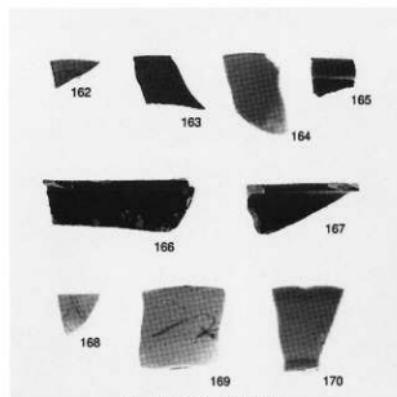


3 水田跡出土遺物

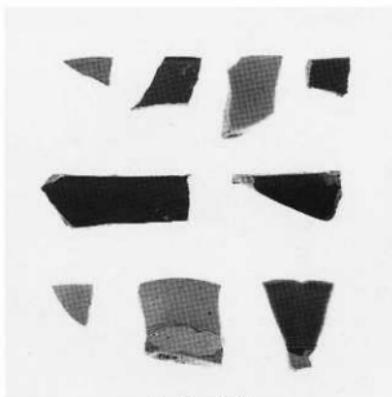


4 出土鉄製品（正面）

（側面）



5 出土陶磁器（外面）



6 同（内面）

# 報告書抄録

ふりがな	いじり	すずめた	おきのた				
書名	井戸遺跡	雀田遺跡	沖ノ田遺跡				
副書名	主要地方道南俣宮崎線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次	第1集						
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号	第35集						
編著者名	橋本英俊・山口昇・南中道隆ほか						
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター						
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地						
発行年月日	2001年3月9日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
いじり 井戸遺跡	みやざきしおおきあさとう 宮崎市大字跡江 あさとうじり 字井戸 4612,4296-3	31°56'36" 付近	131°22'46" 付近	1999.11.25 ~ 2000.1.31	1,920m <sup>2</sup>	道路改築	
すずめた 雀田遺跡	みやざきしおおきあさとう 宮崎市大字跡江 あさとうじり 字雀田 2766-3,3267-3,2769-3	31°56'17" 付近	131°23'20" 付近	1999.12.3 ~ 2000.1.31	4,112m <sup>2</sup>	〃	
おきのた 沖ノ田遺跡	みやざきしおおきあさとう 宮崎市大字跡江 あさとうじり 字沖ノ田 3855-1他	31°56'27" 付近	131°23'07" 付近	2000.4.29 ~ 2000.7.19	1,184m <sup>2</sup>	〃	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
井戸遺跡	集落 生産遺跡	古中	代世	竪穴住居 古代・中世の水田跡	土師器 布痕土器		
雀田遺跡	生産遺跡	古中	代世	古代～中世の水田跡	須恵器		
沖ノ田遺跡	生産遺跡	古中	代世	古代・中世の水田跡 (畦畔・水口)	土師器 陶鐵 磁製品		

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第35集

井 尻 遺 跡

雀 田 遺 跡

沖 ノ 田 遺 跡

主要地方道南俣宮崎線道路改築事業に伴う発掘調査報告書

発行年月日 平成13年3月9日

編集発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地  
TEL (0985)36-1171 代表

印 刷 秀巧社印刷株式会社

〒815-0035 福岡市南区向野2-13-29  
TEL (092)541-5661

---